

# 中村町遺跡 4

— 中村町遺跡第5次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第 1159 集

2012

福岡市教育委員会

『中村町遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1159集

頁	行	誤	正
6	15	縄文土器は確認できなかった。	遺物は確認できなかった。
10	32	3 下層の遺構と遺物	3 黄灰褐色シルト層下層の遺構と遺物
38	8	「クレスト技法」の手法	「クレスト技法」的手法
38	11	指摘される。	指摘できる。
38	13	368は細石刃核の母核	367は細石刃核の母核
38	13	369、370は不整形ながら	368、369は不整形ながら
38	15	371～373は細石刃状の	372～374は細石刃状の
38	16	371、372は細石刃核打面形成時	370、371は細石刃核打面形成時
38	19行の最後に追加		376は細石刃である。
41	9	XXXXから出土した縄文時代X期の	この2カ所から出土した縄文時代前～中期の

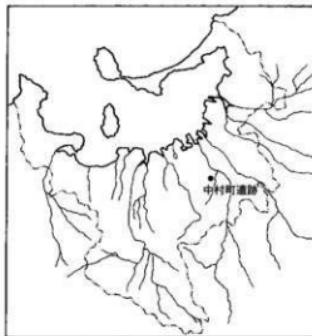
NO. 789a3

# 中村町遺跡 4

— 中村町遺跡第5次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第1159集



遺跡略号 NMM-5

調査番号 1010

2012

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する南区の中村町遺跡の発掘調査報告書は共同住宅の新築に伴う調査成果についての記録です。この調査では上面で弥生時代後期から古代の集落が出土した他、下層から縄文時代前期の包含層から多くの土器や石器、植物遺体が出土しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2012年3月16日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例　　言

- 本報告書は南区野間3丁目160番3の共同住宅新築に伴って2010年5月24日から8月20日にかけて発掘調査を行った中村町遺跡第5次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 遺構の実測と写真撮影は屋山が、遺物の実測は吉留秀敏・板倉有大・濱石正子・屋山が、製図は熊谷幸重・屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 植物遺存体の分析については株式会社パレオ・ラボの佐々木由香氏の協力を得た。

遺跡調査番号	1010	遺跡番号	0167	分布地図番号	高宮51
調査地番	福岡市南区野間3丁目160番3		調査原因	共同住宅建設	
開発面積	650m <sup>2</sup>	調査面積	650m <sup>2</sup>		
調査期間	20100524~20100820		担当者	屋山洋	

## 本文目次

I	はじめに	1
II	調査の記録	6
1	調査の経過と概要	6
2	灰黄褐色シルト層上面の遺構と遺物	6
1)	溝	6
2)	掘立柱建物	7
3)	土坑	10
4)	包含層	10
3	灰黄褐色シルト層下層の遺構と遺物	10
1)	河川	10
2)	土器	18
3)	石器	29
4)	植物遺存体	30
4	小結	31
III	中村町遺跡第5次調査黒曜石製石器について 板倉 有大	33
IV	中村町遺跡第5次調査出土旧石器遺物について 吉留 秀敏	38
V	中村町遺跡第5次調査出土植物遺存体について 佐々木由香 他	41
1	中村町第5次調査出土葉の同定	41
2	放射性炭素年代測定	44
3	中村町遺跡第5次調査出土編組製品の素材同定	46

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地点位置図	3
第3図	5次調査周辺図	3
第4図	調査範囲図	4
第5図	下層河川位置図	4
第6図	第1面遺構配置図	5
第7図	第1面溝土層実測図	7
第8図	掘立柱建物実測図	8
第9図	土坑実測図	9
第10図	縄文河川出土遺物実測図1	11
第11図	縄文河川出土遺物実測図2	12
第12図	縄文河川出土遺物実測図3	13
第13図	縄文河川出土遺物実測図4	14
第14図	縄文河川出土遺物実測図5	15
第15図	縄文河川出土遺物実測図6	16

第16図	縄文河川出土遺物実測図7	17
第17図	縄文河川出土遺物実測図8	18
第18図	縄文河川出土遺物実測図9	19
第19図	縄文河川出土遺物実測図10	20
第20図	縄文河川出土遺物実測図11	21
第21図	縄文河川出土遺物実測図12	22
第22図	縄文河川出土遺物実測図13	23
第23図	縄文河川出土遺物実測図14	24
第24図	縄文河川出土遺物実測図15	25
第25図	縄文河川出土遺物実測図16	26
第26図	縄文河川出土遺物実測図17	27
第27図	縄文河川出土遺物実測図18	28
第28図	縄文河川出土遺物実測図19	29
第29図	黒曜石器群の最大長・最大幅	34
第30図	縄文河川出土遺物実測図20(1/1)	34
第31図	縄文河川出土遺物実測図21(1/1)	35
第32図	旧石器遺物実測図1(1/1)	39
第33図	旧石器遺物実測図2(1/1)	40

## 表 目 次

表1	石器分類表1(サスカイト・安山岩製)	30
表2	石器分類表2(その他石材)	31
表3	遺構・遺物一覧	31
表4	黒曜石器群の器種構成	33
表5	下層黒曜石器群計測表	36

## 図 版 目 次

図版1	1. I区	2. II区				
図版2	1. I区包含層除去状況	2. I区包含層除去状況	3. SD1003			
	4. SD1029	5. SD1002・1003	6. SD1041	7. II区	8. III区	
図版3	1. SD1003	EF間ベルト	2. SD1029	AB間ベルト	3. SD1029	BC間ベルト
	4. SD1029	DE間ベルト	5. SD1041土層	7. SD1002・1003検出状況		
	7. SD1002土層	8. SD1003	CD間ベルト			
図版4	1. SK1053	2. SK1053土層	3. SD1002遺物出土状況	4. SK1018		
	5. 植物遺存体出土状況1	6. 植物遺存体出土状況2	7. 植物遺存体出土状況3			
	8. 植物遺存体出土状況4.					
図版5	1. 縄文河川遺物出土状況	2. 縄文河川西端土層	3. 縄文河川	4. 縄文河川切り合い		
	5. 縄文河川西端土層	6. Aトレンチ土層	7. Cトレンチ土層	8. 調査区南壁土層		

## I はじめに

### 1 調査に至る経過

平成22年（2010年）3月25日付けで中村建設株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に福岡市南区野間3丁目160番3における埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号21-2-909）が提出された。申請地は平成21年2月25日の試掘調査（事前審査番号 20-1-118）により表土下80cmに包含層が存在することが判明しており、今回の共同住宅の建築計画と照らし合わせると遺跡の破壊が避けられないことが判明した。そのため工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。以上の協議を受けて平成22年（2010年）5月24日から8月20日の期間で発掘調査を行った。

調査期間中は原因者及び関係者各位から休憩所の借り上げや水道の設置、廃土の場外搬出などで多大なご協力を得た。記して感謝したい。

## 2 調査の組織

調査主体

教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課課長 田中壽夫

調査第1係係長 米倉秀紀

調査庶務 井上幸江

調査担当 屋山 洋

作業員 岡部安正 片桐武俊 河原明子 桑原美津子 鈴木誠 中村健三 夏秋弘子 平田周二

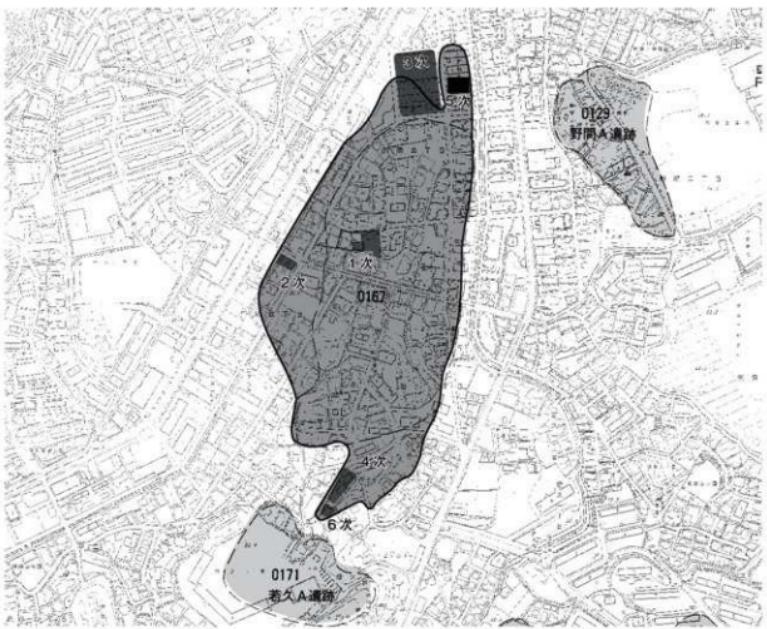
吹春憲治 前田佳代 御手洗史子

整理作業 熊谷幸重 藤野洋子

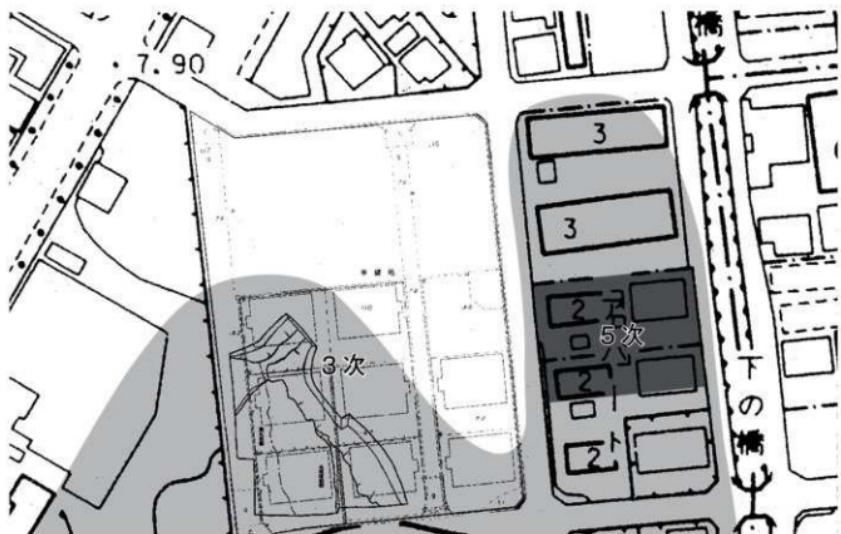
## 3 遺跡の立地と環境

中村町遺跡は片縄山から北東に延びて福岡城に達する第3紀層を基盤とした丘陵上に位置する。この丘陵は東の那珂川と西の樋井川の流域を分ける丘陵で、現在は多くの谷の解析により分断された丘陵群となっている。中村町遺跡はこの片縄山と福岡城の間のほぼ中間地点にあたり、丘陵西側端部に位置する。丘陵東端には警固断層が存在しており、断層による地盤沈下と那珂川によって堆積した土砂によって現在丘陵と那珂川の間には幅2km弱の平地が広がる。この平地が形成された時期はよく判らないが、ある時期までは海が入り込んで入り江となっていたとの話があり、西鉄大橋駅東側の「塩原」の地名は付近にあった塩田の名残との説も存在する。少なくとも縄文海進が最も進んだ縄文前期には那珂川流域に沿って海が入り込んでいた可能性があり、その場合中村町遺跡の北側に内湾が広がっていた可能性がある。また、古代になると丘陵東端に鴻臚館と大宰府を結ぶ官道の1つである「西門ルート」が築かれるが、中村町遺跡の北側を通る通称「大池通り」は中村町遺跡がのる丘陵と北側の鴻巣山の間の谷部を通る東西方向の道で、古来から那珂川流域と樋井川流域を結ぶ交通路として利用されていた可能性があるり、「西門ルート」との分岐点に位置し交通の要所であったと考えられることは、遺跡内で確認されている古代の遺構の性格を考える上で重要なポイントであると思われる。

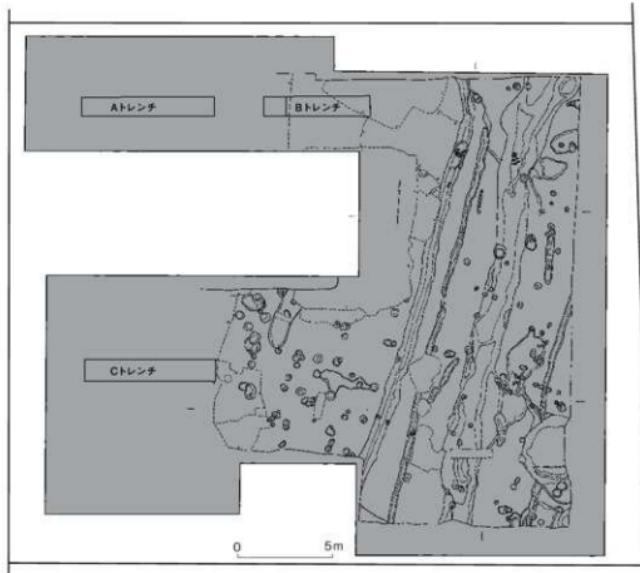




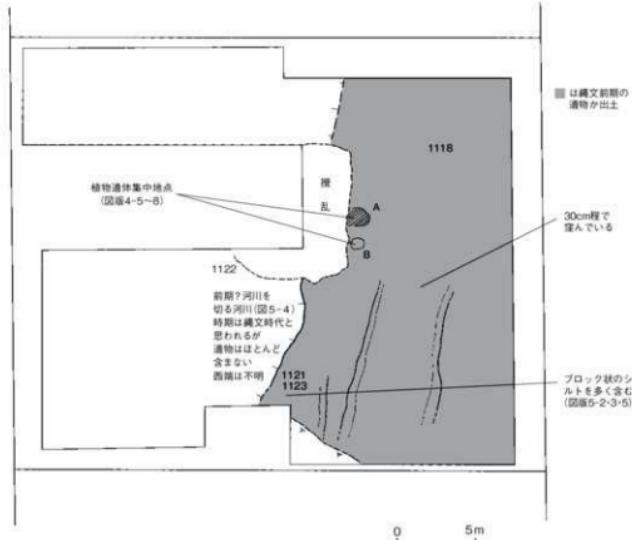
第2図 調査地点位置図 (1/6,000)



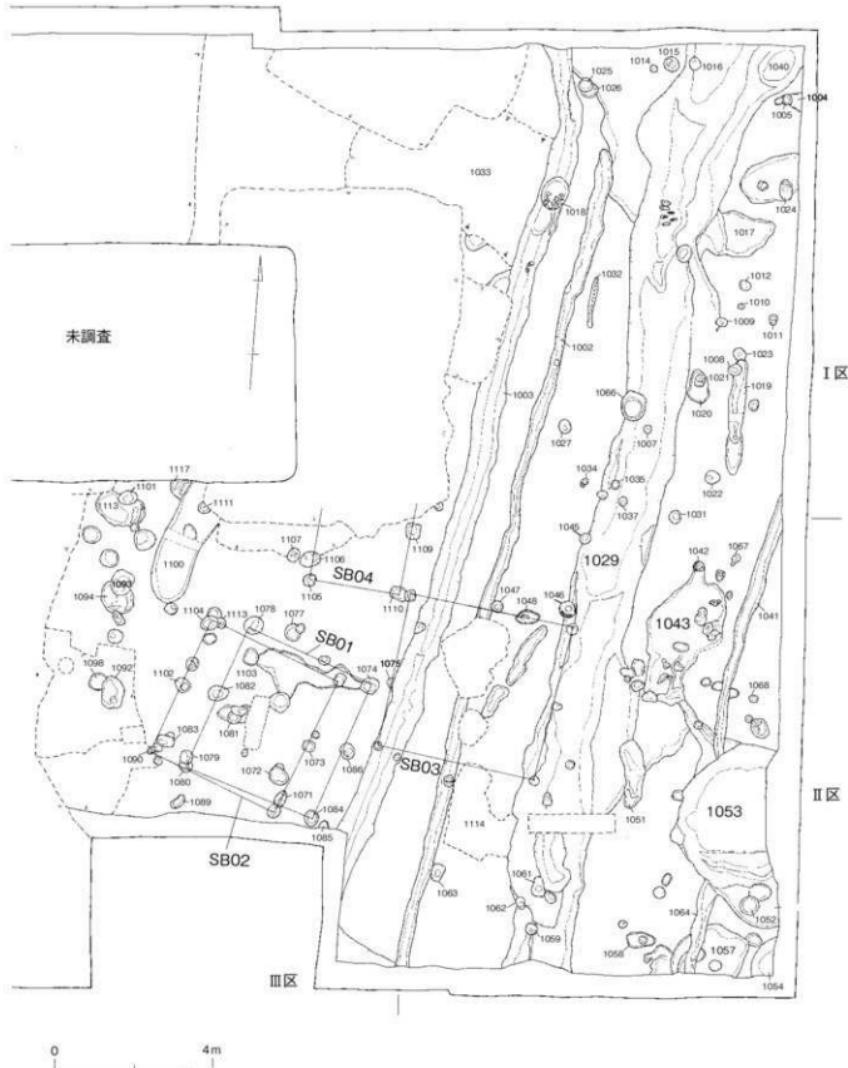
第3図 5次調査周辺図 (1/1,000)



第4図 調査範囲図 (1/250)



第5図 下層河川位置図 (1/300)



第6図 第1面構造配置図 (1/120)

## II. 調査の記録

### 1 調査の経過と概要

本調査区は中村町遺跡がのる丘陵の東側に隣接する谷部に位置する。もともと中村町遺跡の隣接地で包蔵地外であったが、当地での申請（20-1-118）に伴い2009年2月に行われた試掘調査で、現地表面から100cm下の灰黄褐色シルト層（以下シルト層とする）上面で弥生時代～古代の包含層と柱穴状の掘り込みが確認されたため、包蔵地が東側に拡張され中村町遺跡に含まれることとなった。

今回の調査では地表面から遺構面までの深さが1mと深く、多量の廃土が出ることから遺構面までの表土を原因者側が場外搬出することとなり、表土の鋤取りを5月19日から21日までの3日間で行なった。その後5月24日に発掘機材の搬入を行った後、5月26日に小型の重機を入れ、調査区中央から西側の3カ所にトレーナーを設定して包含層下の土層と遺物出土状況の確認を行った。その結果、シルト層は調査区中央では安定しており厚さ60cm程堆積しているものの、中央から西側では不安定で急に薄くなり、西端から5～7m地点ではシルトの厚さは5cm前後になる。また西端部では新しい流路に削られ、シルト層及び遺構等は確認できなかった。また、西側のシルト層下は粗砂層となっており、中央の縄文土器を含む砂礫層とは様相が異なる。トレーナー調査は縄文土器包含層に気づく以前ではあるが、重機で掘りあげた土を観察した範囲では縄文土器は確認できなかった。

第1面の調査は5月27日から開始し、シルト層上に堆積した包含層を掘り上げ、その後シルト層上面の遺構検出を行うと共に調査区北端部にトレーナーを設定して手掘りで掘り下げたところ、シルト層の上層部で若干の弥生土器と思われる土器小片が出土した他、シルト層下の砂礫層から縄文時代前期の轟B式土器と曾晲式土器が多数出土した。縄文土器を含む層の広がりを調べるために調査区中央部と南端にもトレーナーを設定して掘り下げたところ、同様に土器が出土したため全面に包含層があることが判明した。予定していた遺構面から1m以上掘り下げる必要が出てきたことから、調査工程を見直してシルト層上面をI～III区に分けて、それぞれ上面の調査が終了後、シルト層を除去（一部重機を使用したが、ほぼ手掘りによる掘り下げ）後、下層の砂礫層の掘り下げを行った。掘り下げは8月12日に終了、13日に機材の撤去を行い、その後は室見整理室で出土した木の葉の分類等を行った。

### 2 灰黄褐色シルト層上面の遺構と遺物

（出土遺物の詳細はP31の遺構・遺物一覧表に記載）

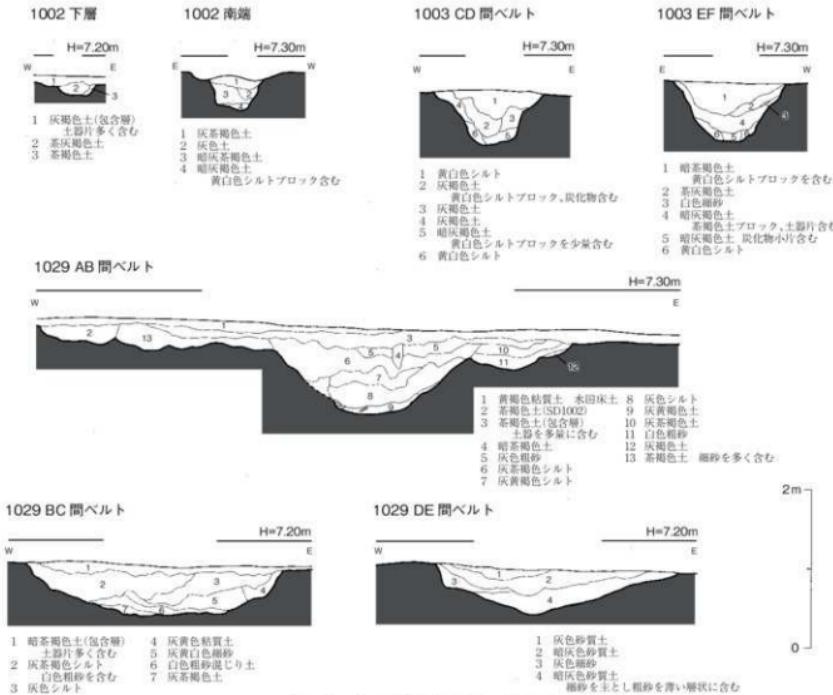
#### 1) 溝

SD1002（第7図） 調査区東側に位置するほぼ直線の溝で、南側は調査区外に延び、北側は北端部で立ち上がる。調査区内で長さ26m、幅30～40cm、深さ5～10cmを測り、主軸はN-12°-Eを測る。断面は逆台形を呈し、埋土はやや灰色を帯びた茶褐色を呈す。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期を主とするが、須恵器大甕片が出土しており、古墳時代後期以降である。

SD1003（第7図） SD1002の西側に位置し、SK1018に切られる。調査区内で長さ27m、幅70～80cm、深さ約30cmを測り、主軸はN-12°-Eを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は複雑で観察場所ごとに異なる。一部白色砂を含み流水の痕跡がみられる他、黄白色シルトブロックも多く含む。調査区北端で西側に曲がる。遺物は弥生時代から古墳時代前期の遺物が多量に出土したが、須恵器高台付壺や土師碗が数点出土しており、8世紀以降の古代に属すると思われる。

SD1019（第6図） 調査区東端中央に位置する。長さ2.9m、幅42cm、深さ14cmを測り、主軸はほぼ南北である。9点出土遺物のうち1点が8世紀後半の須恵器高台付壺で、他は素焼きの小片である。

SD1029（第7図） SD1002の東側に位置する南北方向の溝で、両端とも調査区外に延びる。若干蛇行しており、調査区内で長さ30m、幅1.5～2.5m、深さ50cmを測る。主軸はN-10°-E前後で、断面は逆三



第7図 第1面溝土層実測図(1/60)

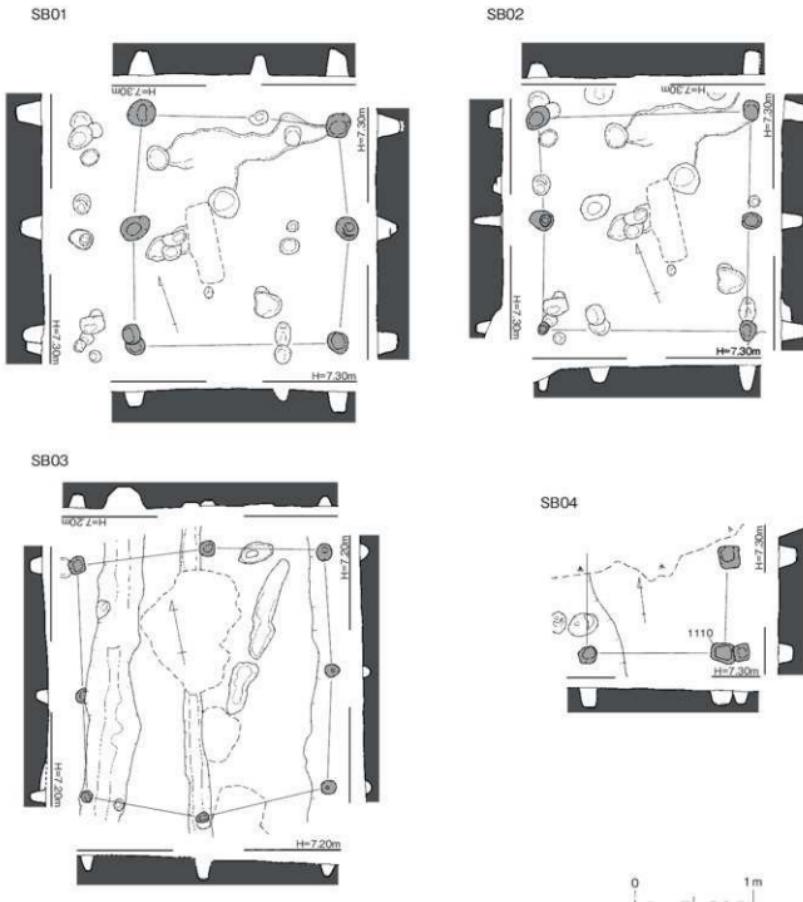
角形を呈す。埋土は灰褐色土と茶褐色土を主とするが、砂層を含むなど一時的に流水があった痕跡がみられる。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期が主で須恵器壺蓋、須恵器高台付壺を数点含む。SB03との切り合いから8世紀以降の古代に属すると考えられる。

SD1032（第6図）SD1002の東側に位置する南北方向の溝で長さ13cm、幅15cm、深さ4cmを測る。遺物は時期不明の土器小片が9点出土した。

SD1041（第6図）調査区の東南隅に位置する南北方向の溝で、南半分はやや蛇行する。SK1053の南側に延びるSD1061と同一の溝と思われる。調査区内で長さ15m、幅40cm、深さ30cmを測る。主軸はN-12°-EでSD1002に平行する。断面はU字形を呈し、埋土はやや汚れた黄灰褐色シルトである。黄白色シルトブロックを少量含む。遺物は時期不明の小片が17点出土した。

2) 挖立柱建物 調査区中央付近で4棟の掘立柱建物を検出した。SB01・02以外は若干主軸がズレるもの、いすれも溝に沿う印象を受ける。遺物は溝や土坑と同様に弥生時代中期～古墳時代前期の遺物が多いものの時期的には古代以降に属すると思われる。

SB01（第8図）調査区中央南寄りに位置する1×2間の建物で主軸をN-20°-Eにとる。柱穴の平面形はややいびつな円形もしくは楕円形で径33～52cm、深さ33～47cmを測る。柱痕跡は確認できなかつた。梁間は全長3.5m、桁行きは全長3.7mを測る。桁行きの柱間は1.7～2.0mを測る。梁間中央の柱穴が抜けている印象があり、調査時に精査したが柱穴は検出できなかつた。遺物は各柱穴から出土したが、



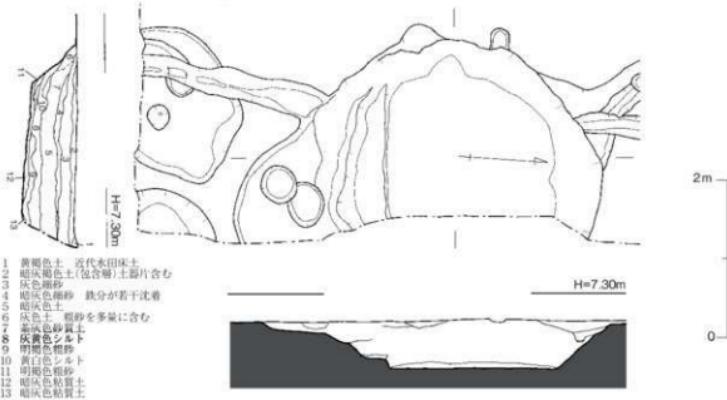
第8図 掘立柱建物実測図（1/40）

時期の分かれる遺物は弥生時代～古墳時代前期である。

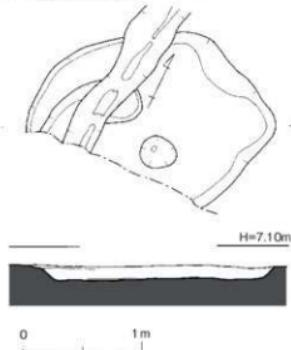
**SB02**（第8図） SB01とはほぼ同位置、同規模の建物で主軸もN-21°-Eとほぼ同じなため建て替えと思われるが、柱穴の切り合いがないため前後関係は不明である。柱穴の平面形は楕円もしくは隅丸長方形で径は22~44cm、深さ23~48cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。梁間は全長3.6m、桁行きは全长3.7m、桁行きの柱間は1.7~1.9mを測る。遺物はSP1073・1090・1104・1112から出土したが、時期の分かれる遺物は弥生時代中期～古墳時代前期である。

**SB03**（第8図） SB01・02の東側に位置する2×2間の建物でSB04を切る。主軸をN-12°-Eにとる。

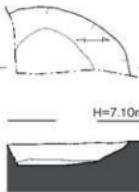
SK1053(1/60)



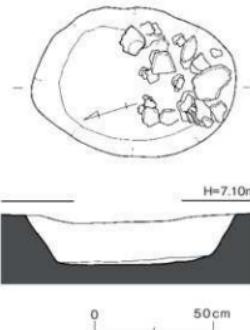
SK1057(1/40)



SK1054(1/40)



SK1018(1/20)



第9図 土坑実測図(1/20・1/40・1/60)

建物中央部に攪乱があり、本来は総柱建物である可能性もある。建物西辺をSD1003に切られ、東辺がSD1029を切る。東西4m、南北4mとほぼ正方形の建物である。柱穴の平面形は楕円もしくは方形で径は21~27cm、深さ9~27cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。柱間は1.7~2.2mを測る。遺物はSP1042・1049・1075・1115・1116から出土したが、時期の分かる遺物は1042から古墳時代後期から古代と思われる須恵器片が出土した。

SB04(第8図) SB01・02の北側に位置する。遺構の北側を攪乱に切られ、全容は不明である。主軸はN 8°-Eを測る。柱穴の平面形は方形とやや隅丸の長方形で径30~40cm、深さ25~33cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。柱間は南北1.7m、東西2.3mを測る。遺物は各柱穴から出土したが、建物に伴う可能性がある遺物はSP1110から古代と思われる須恵器片が出土した。

### 3) 土坑

SK1018（第9図） 調査区の北端寄りに位置し、SD1003を切る。平面は梢円形を呈し、長径85cm、短径63cm、深さ21cmを測る。主軸はN=18°-Eを測る。断面は浅皿状で、埋土は灰茶褐色を呈す。遺構の南側上面から土器片がまとまって出土した。遺物の時期は弥生時代後期から古墳時代前期であるが、7～8世紀のSD1003を切ることから8世紀以降である。

SK1043（第6図） 調査区の東南側に位置する南北に長い不整形の土坑である。南北3.2m、東西1.8m、深さ7cmを測る。SK1053と溝でつながっているが、更に北側に伸びてSD1019につながっていた可能性がある。埋土から弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土したが1053との関連から古墳時代後期以降である。

SK1053（第9図） 調査区の東南隅に位置する。遺構の東端が調査区外に延びる。南北径3.6m、深さ62cmを測る。覆土は水平な堆積で全体に粗砂を多く含んでおり、流水により砂が流入したと思われる。貯水等に使用された土坑の可能性がある。遺物は弥生時代後期の他に古墳時代後期の須恵器壺蓋と高坏片が出土した。SD1041も時期不明であるが、SD1002と主軸が同じであることから、古墳時代後期以降の可能性が高い。そのSD1041を切ることから古墳時代後期～古代と思われる。

SK1054（第9図） 調査区東南隅に位置する。遺構の大半が調査区外である。現状で南北1m、東西56cm、深さ19cmを測る。埋土は淡褐色粗砂で灰黄褐色シルトブロックを含む。河川による堆積と思われる。遺物は7～8世紀の須恵器壺が出土した。

SK1057（第9図） SK1054の西側に位置し、SD1064に切られる。遺構の南半が調査区外に延びるため全容は不明であるが、いびつな梢円形を呈す。現状で南北1.3m、東西1.8m、深さ20cmを測る。遺物は時期不明の土器片が6点出土した。

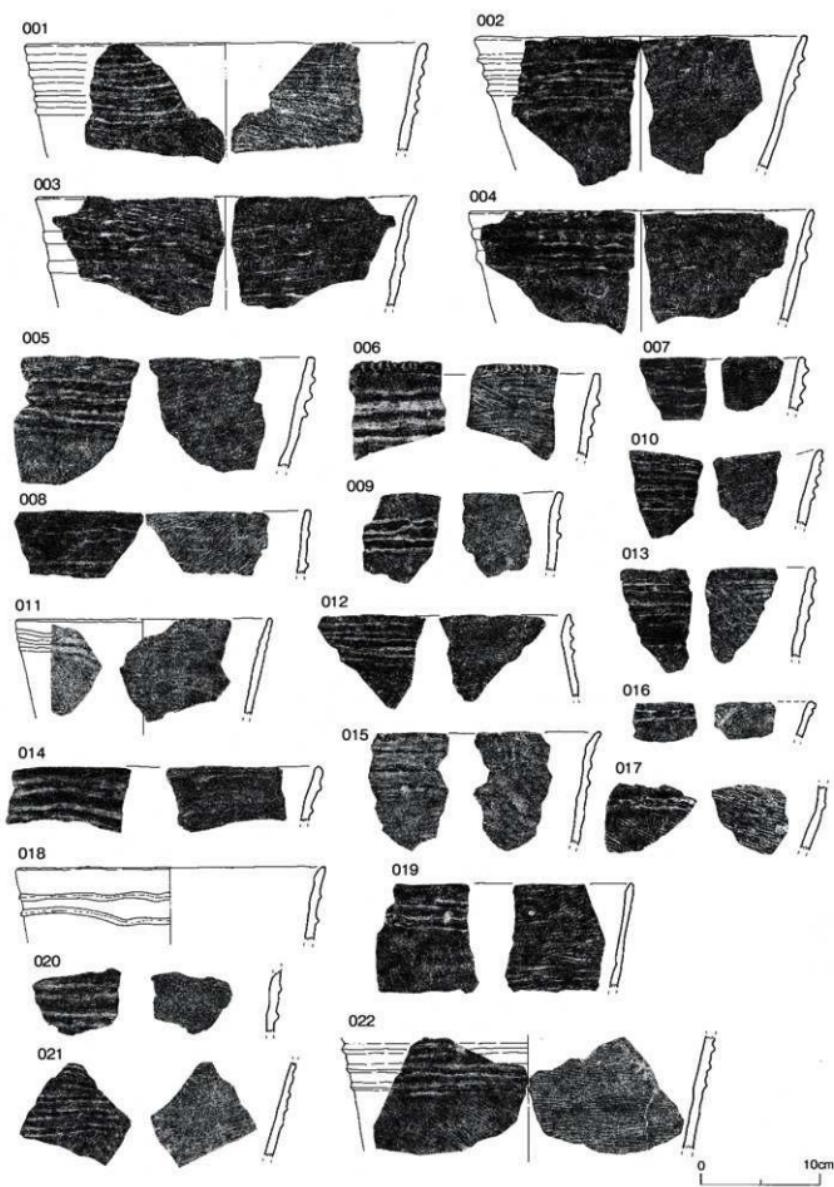
### 4) 包含層

黄褐色シルト層直上にのる暗茶褐色土中から多くの遺物が出土した。暗茶褐色土は調査区中央から西側にかけてのⅠ・Ⅲ区に広がり、特にSD1029は埋没する直前に包含層が堆積したため、溝の最上層は暗茶褐色土が流入していた。包含層に含まれる遺物は弥生時代後期後半～古墳時代前期を主とするが、その他に旧石器、縄文時代前期、弥生時代中期～後期前半、古墳時代後期～古代（8世紀）と広範な時期の遺物を含んでおり、また1点ずつではあるが白磁皿Ⅷ類（14世紀）、染付片（中世～近世）も出土している。時期の異なる遺物が混じって出土していることや、含まれる遺物の時期が西側丘陵上で出土した遺構の時期に似るため、SD1209の埋没時に西側丘陵部の土を削って整地を行い、その際に入り込んだ可能性がある。また、旧石器や縄文時代前期の遺物など現在丘陵上で出土していない遺物も出土しているが、本来は両時期の集落が丘陵上に存在した可能性が考えられる。

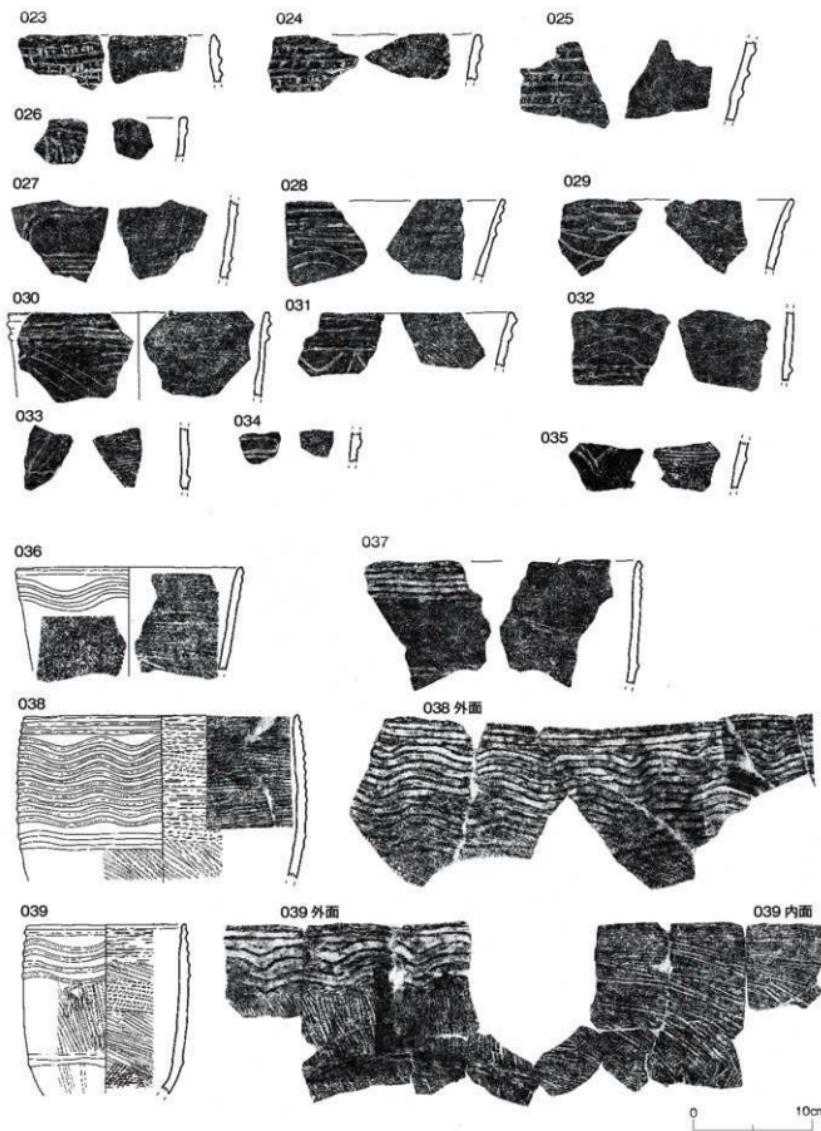
## 3 下層の遺構と遺物

1) 河川 5次調査区は中村町遺跡がのる丘陵東側の谷部に位置し、黄褐色シルト層の下層には全体的に粗砂～砂礫層が広がっている。土層観察では粗砂層の堆積は複雑な切り合いを呈しているが、調査区中央から東側では比較的安定した堆積を示しており、そこから縄文時代前期後半を主とする遺物が出土した。遺物は多量の曾畠式土器、轟式土器の他に石器、植物遺存体等である。前期以外としては中期半の船元式土器が出土した他、早期の押型文土器が2点、旧石器時代のナイフ型石器、細石刃石核等が出土した。

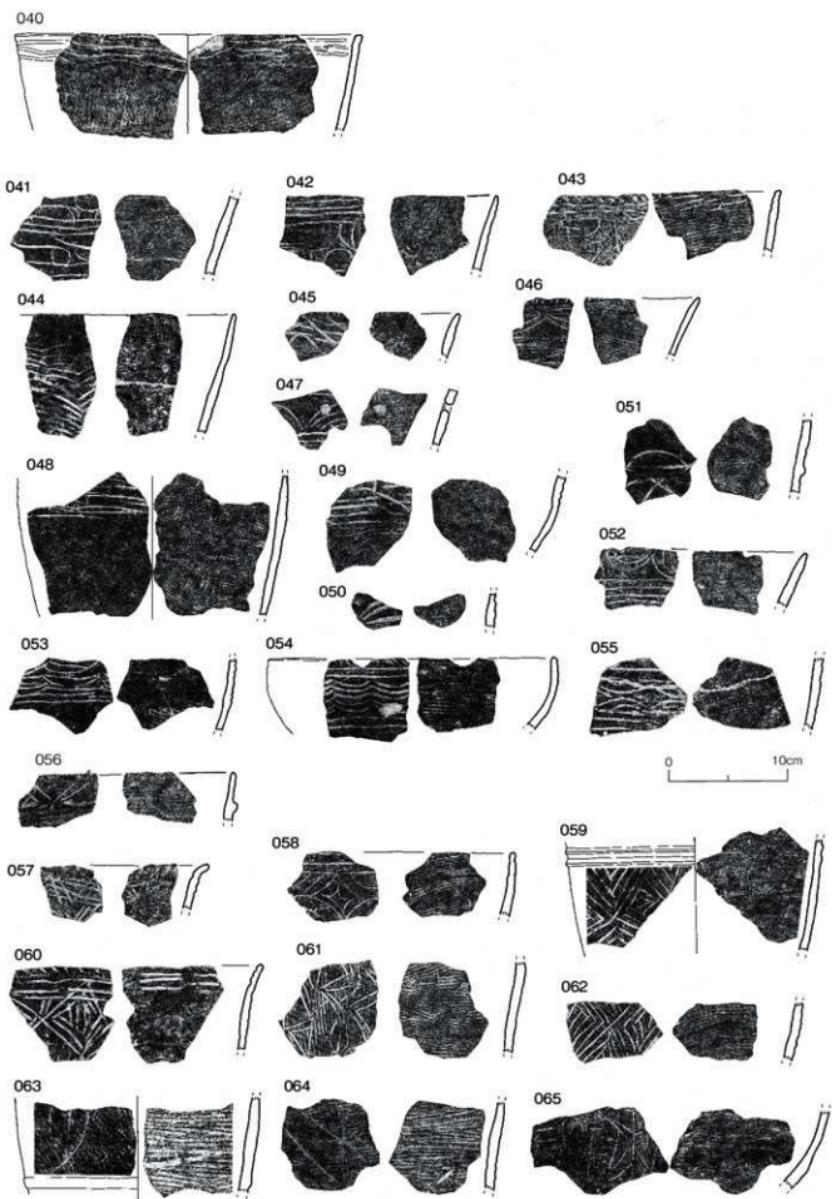
申請地は現在、谷が埋没した平坦面をなすが、元來の谷部底面は現地表面から約4mと深く（原因者のボーリング調査によるもので、底面の推定標高は4m前後を測る）、今回掘り下げた河川底面から



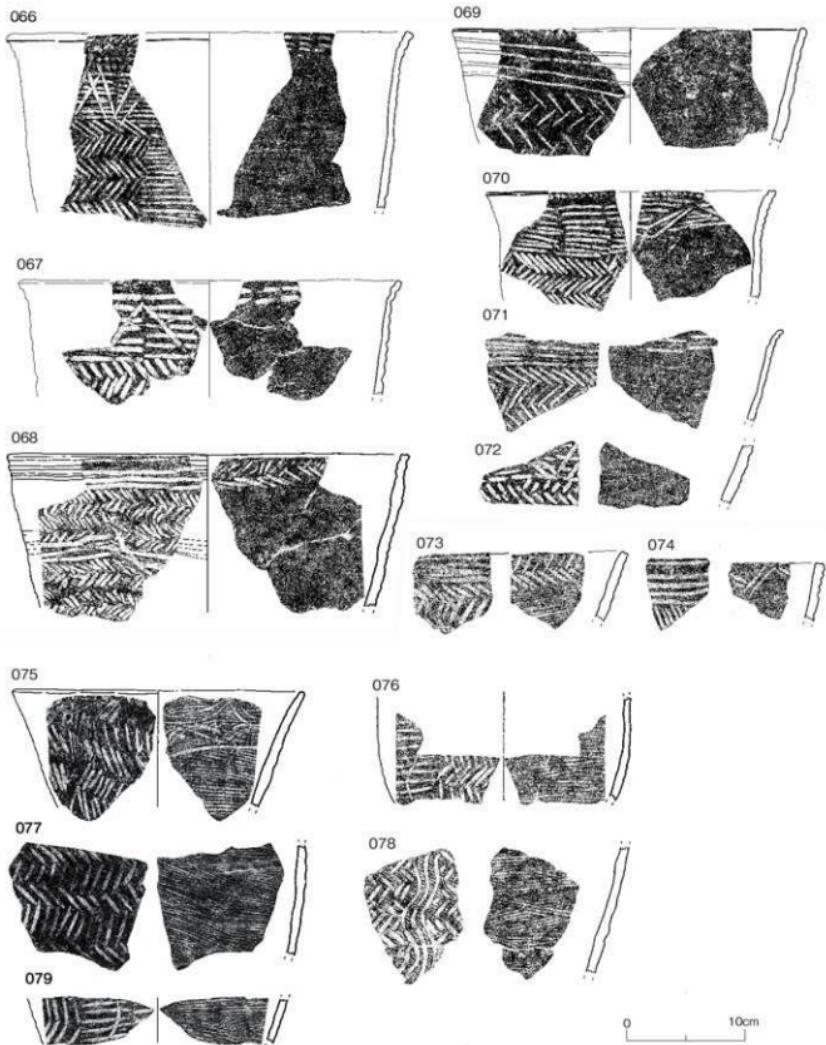
第10図 繩文河川出土遺物実測図1 (1/4)



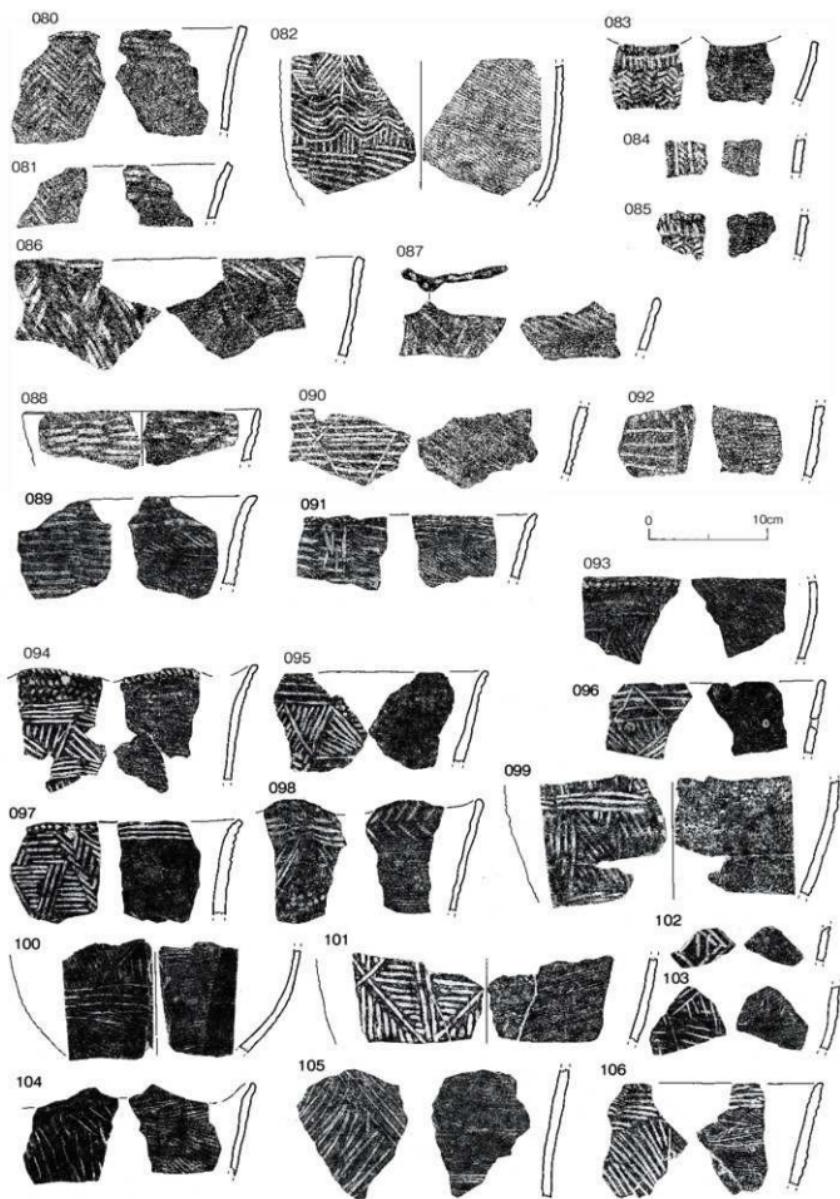
第11図 縄文河川出土遺物実測図2 (1/4)



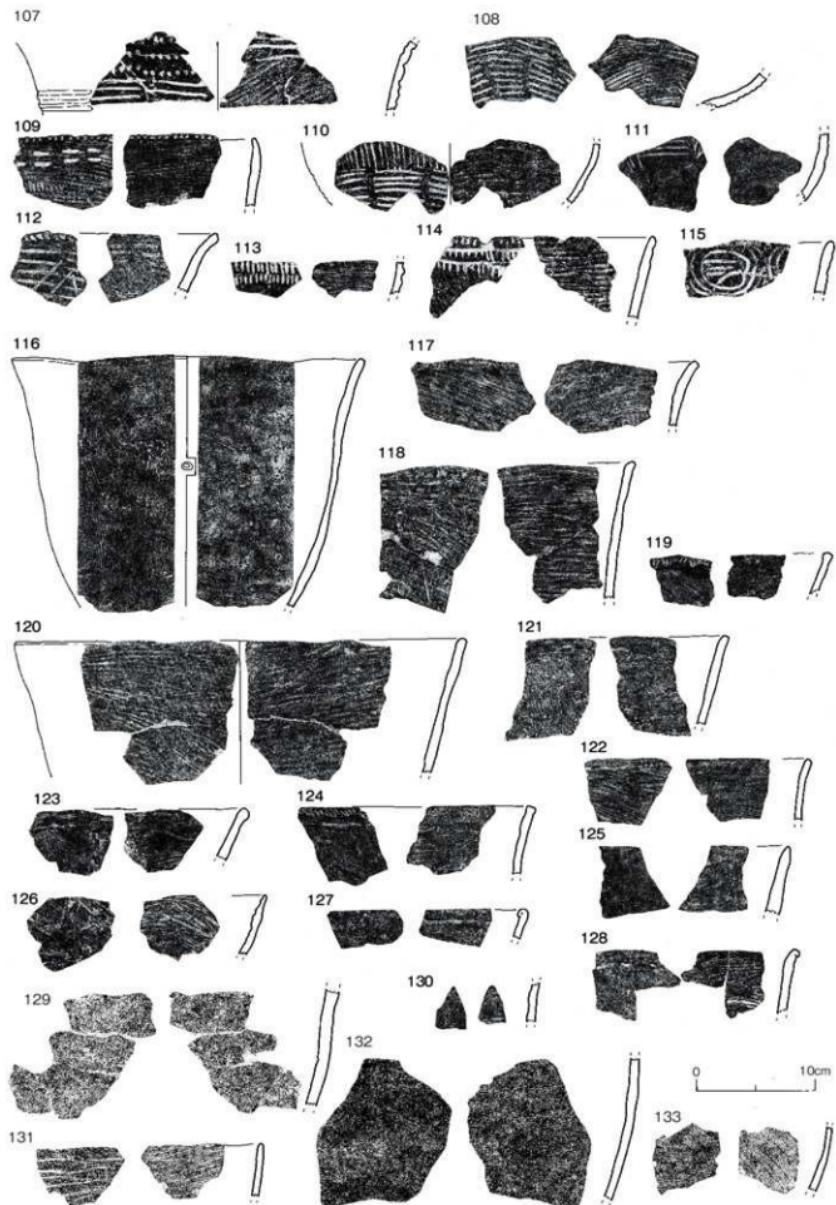
第12図 繩文河川出土遺物実測図3 (1/4)



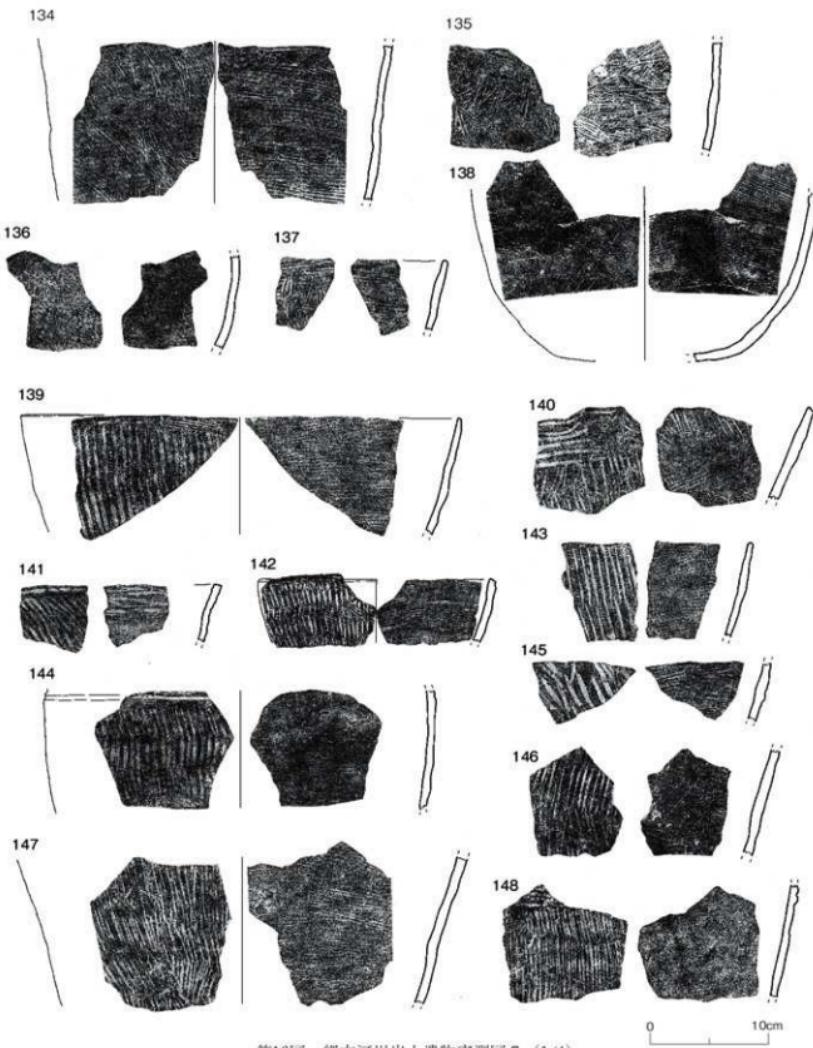
第13図 縄文河川出土遺物実測図4 (1/4)



第14図 縄文河川出土遺物実測図5 (1/4)

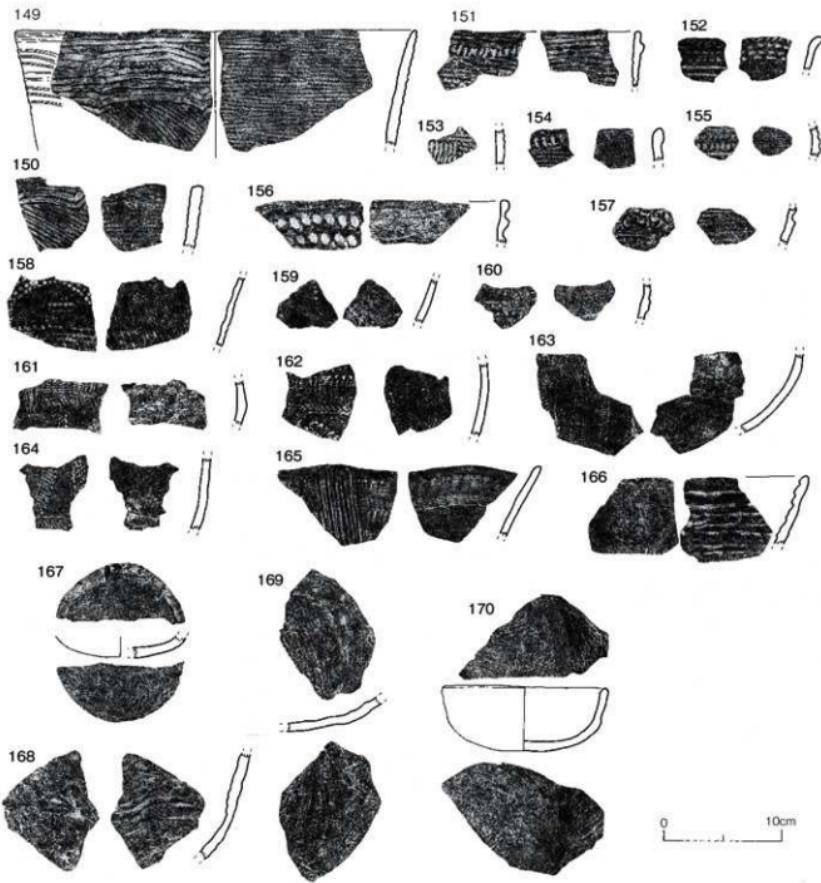


第15図 縄文河川出土遺物実測図 6 (1/4)



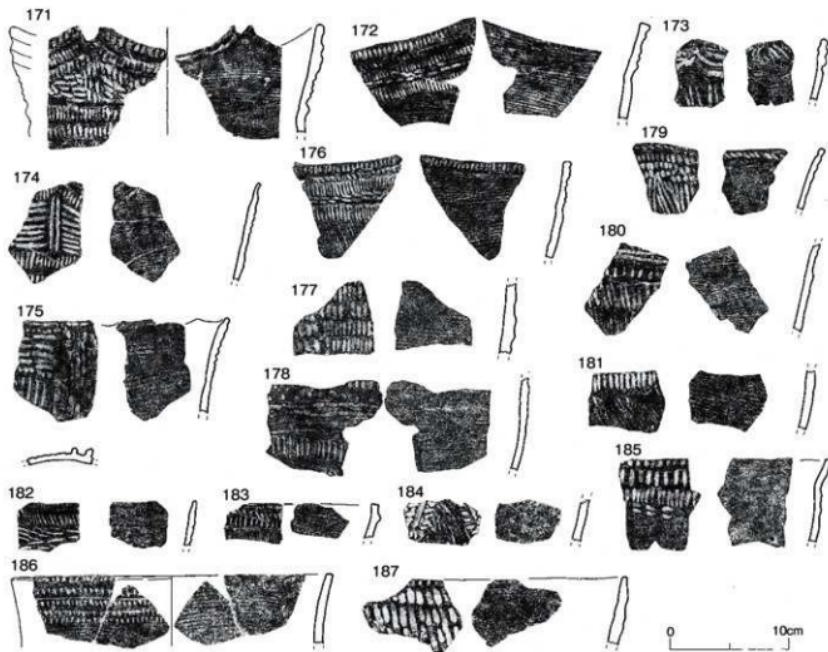
第16図 縄文河川出土遺物実測図7 (1/4)

更に1.5m程深い。現地表から2.5m以上掘り下げると湧水が激しくなり、今回一部掘り下げようとしたところ、瞬時に壁面が崩壊したことから掘り下げを中止した。調査終了時に重機により下層の土を一部掘り上げて調べたところ3点の土器片が出土した。小片で時期は不明であるが、今回調査した層よりも更に下層でも遺物が出土することが判明した。今後の周辺調査では事前審査段階で湧水と壁面崩壊に対する準備を行い、谷部底面まで掘り下げて確認調査を行うことが必要である。



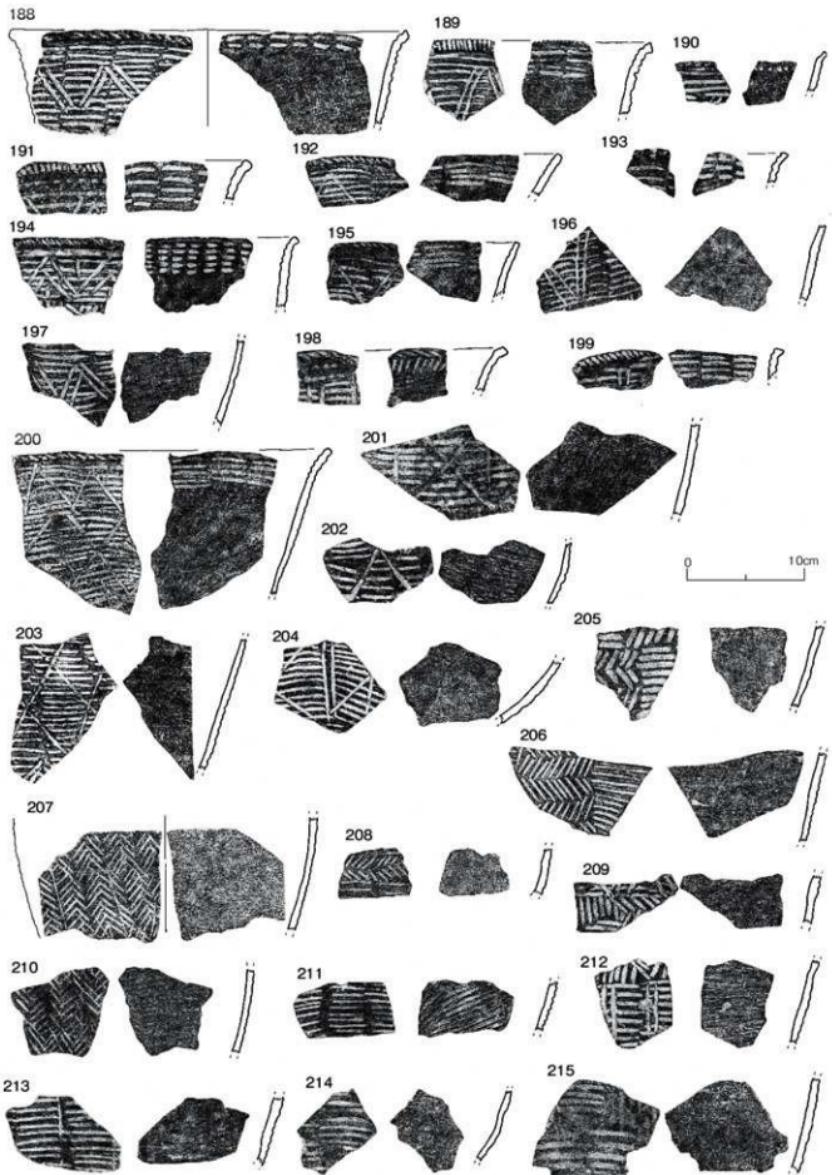
第17図 縄文河川出土遺物実測図 8 (1/4)

2) 土器（第10~21図 001~251）縄文時代前期中頃～後半の轟B式土器と曾畠式土器を主とする他に若干の押型文土器や船元式土器も出土した。001~039は轟B式土器である。口縁部に隆起線文を貼り付ける。隆起線文の突端は2~3条が多いが4条以上のもの（021・037~039）もみられる。また、隆起線文は非常に細いものからやや太めの個体があり、また隆起線文上に刻目を持つもの（023~026）、隆起線文間に線で文様を描くもの（028~033）や渦巻きやV字形の粘土帯を貼り付けるもの（027・035）、隆起線文が波状を呈する（038・039）などバリエーションに富む。口縁は直線を呈する物がほとんどで、口縁端に刻み目を施すものもみられる。040は口縁部の隆起線文の代わりに3条の沈線が巡り、轟B式の隆起線文を沈線にかえた印象を持つ。041~115は曾畠式土器である。口縁直下に沈線を巡らすものが多い。文様の線刻は連弧文や綾杉文の他、三角形や四角形をモチーフにしてそれぞれを

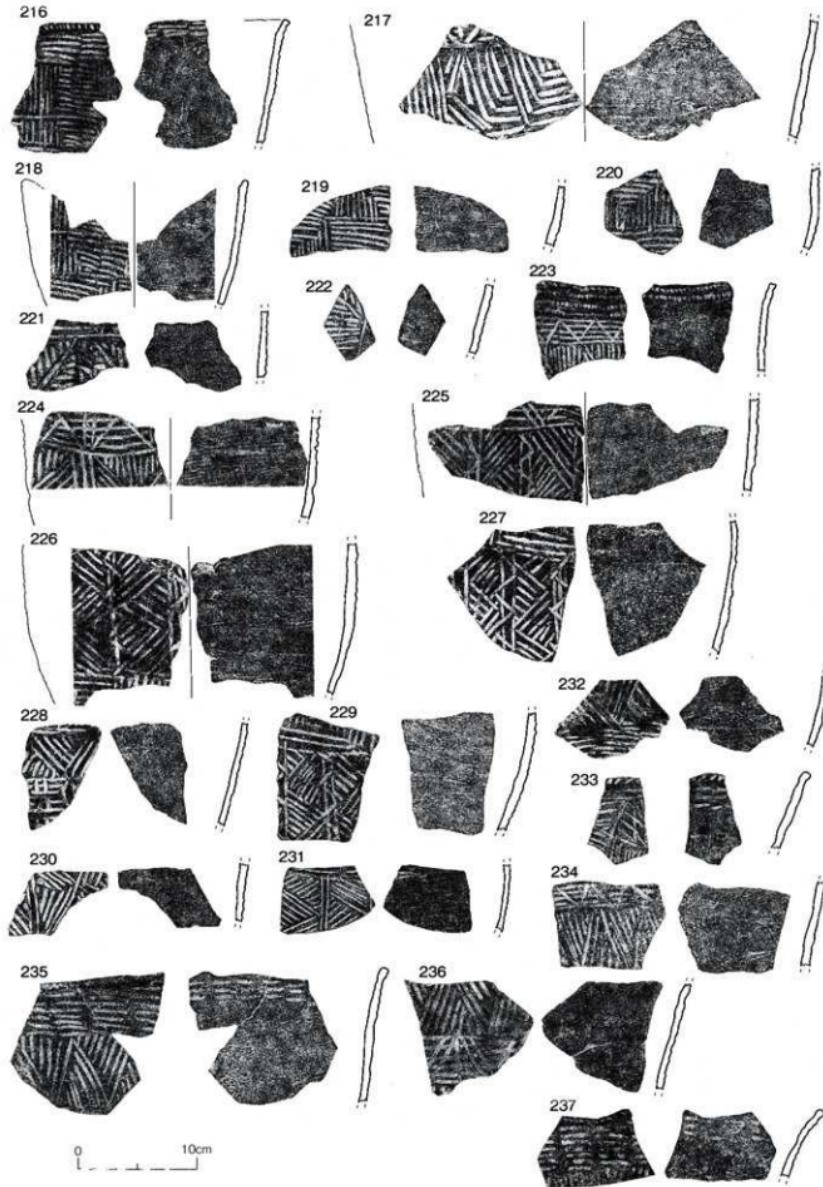


第18図 縄文河川出土遺物実測図9 (1/4)

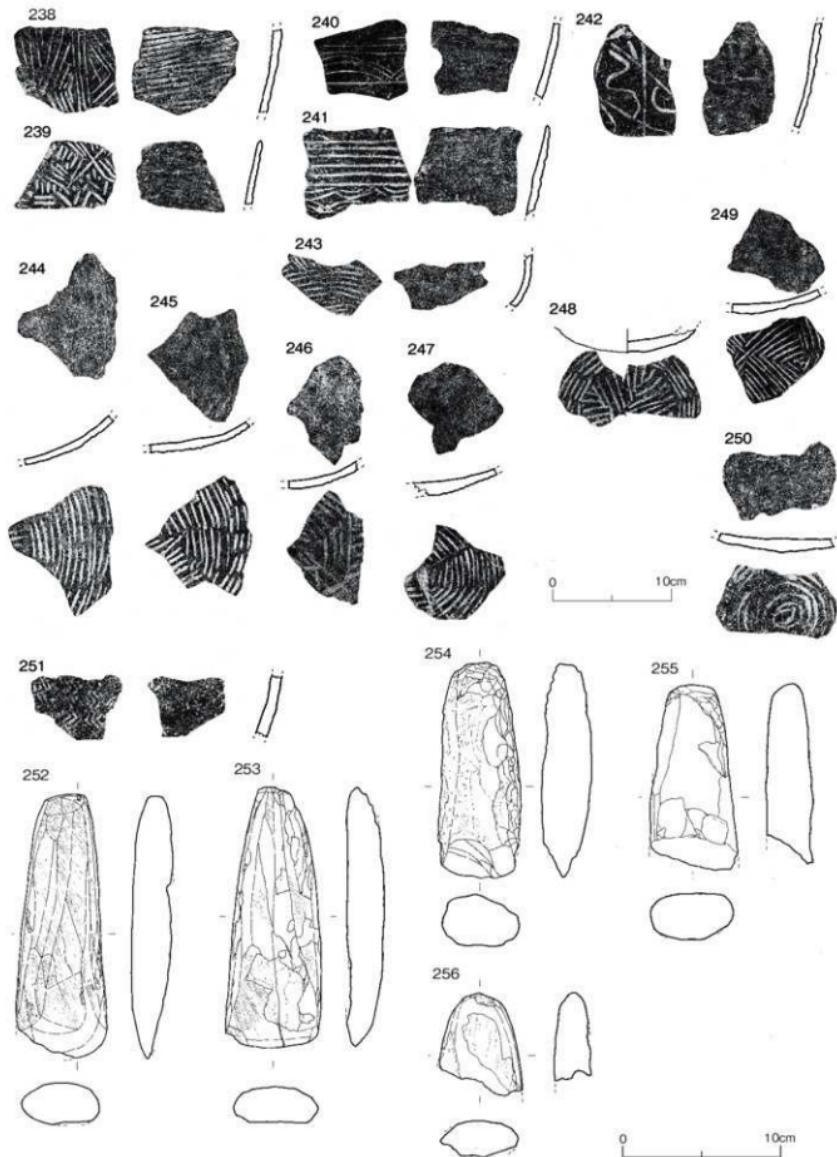
組み合わせるなど、こちらもバリエーションに富む。口縁は直線が多いが、緩やかな弧を描くもの、また波状を呈するものも見られる。また、口縁端に刻み目や刺突文を施すものも多い。041～065は線刻が細目の個体で、そのうち041～043は円を描き、その周囲を開むような線刻を施す。044～055は連弧文である。056は連三角文、058は042・043に似るが中央が円ではなく四角を呈す。066～115は太めの沈線を施した個体である。066～085は短い直線と「ハ」の字の綾杉文状の沈線の組み合わせである。また、中には078・082のように曲線を組み合わせたものも見られ、組み合わせはかなり複雑である。086・087は「ハ」の字型の組み合わせであるが、かなり崩れた様相を示す。090はそれにX状の沈線を施す。094～103は短い直線の組み合わせで三角を描く、104～106は斜線の組み合わせである。107は脇部の沈線上に刺突文を施す。115は口縁に円文を施す。116～148は内外面に条痕を施す。一部線刻との区別が付にくいものがある。口縁は緩やかな凸凹を呈するものが多く、若干リボン状突起をもつ個体がある。116は条痕の上からナデを施す。脇部に補修孔を穿つ。149・150は038に似るが隆起線文ではなく条痕文による波状文である。151～160は刺突文及び押引文、161～165は細かな繩文を施す。166は外面は丁寧なナデを施すが、内面は紐状の粘土を積上げた痕跡をそのまま残す。167・168は深鉢の底部である。緩やかな弧を描く。底部片も多く出土したが、すべてこの形状を呈している。169は浅鉢である。出土した土器はほとんどが深鉢と思われる破片で、浅鉢は少ない。171～187は押引文の組み合わせで、口縁は波状を呈するものが多い。中期前半に属する。188～258は胎土に滑石を含む。文様の組み合わせは滑石を含まないものと似た傾向を示す。



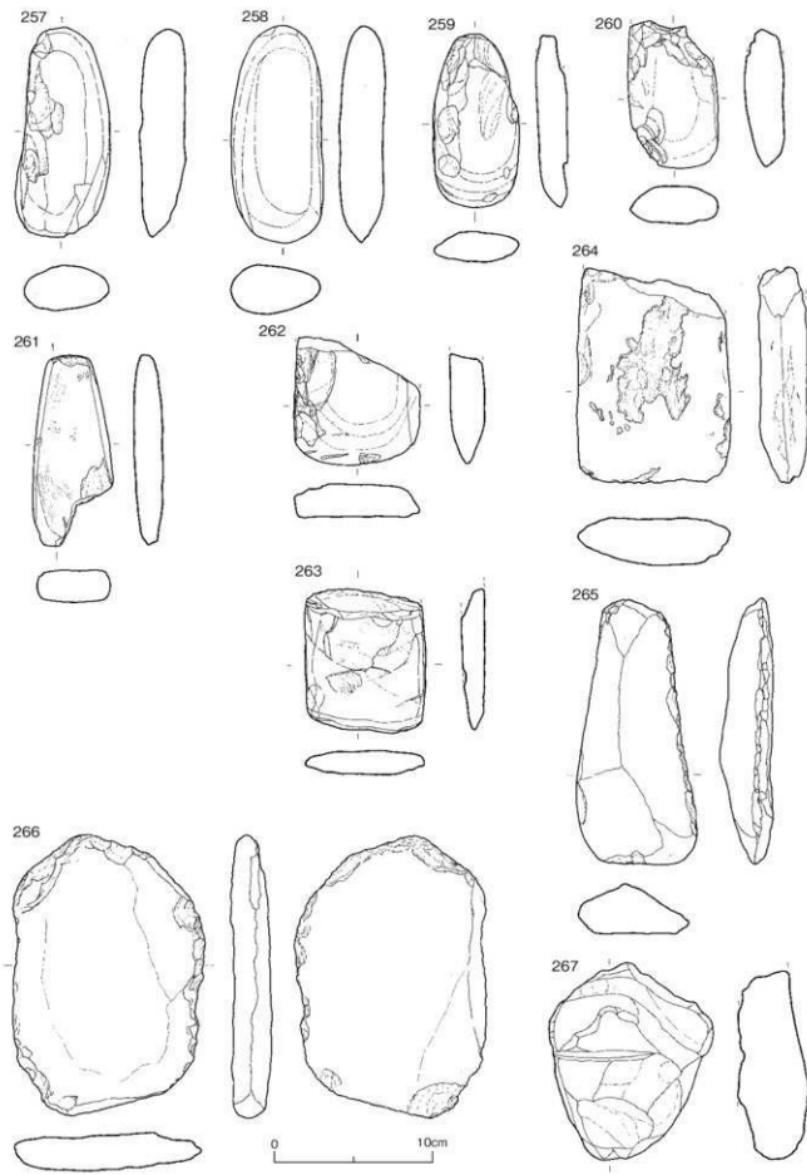
第19図 繩文河川出土遺物実測図10 (1/4)



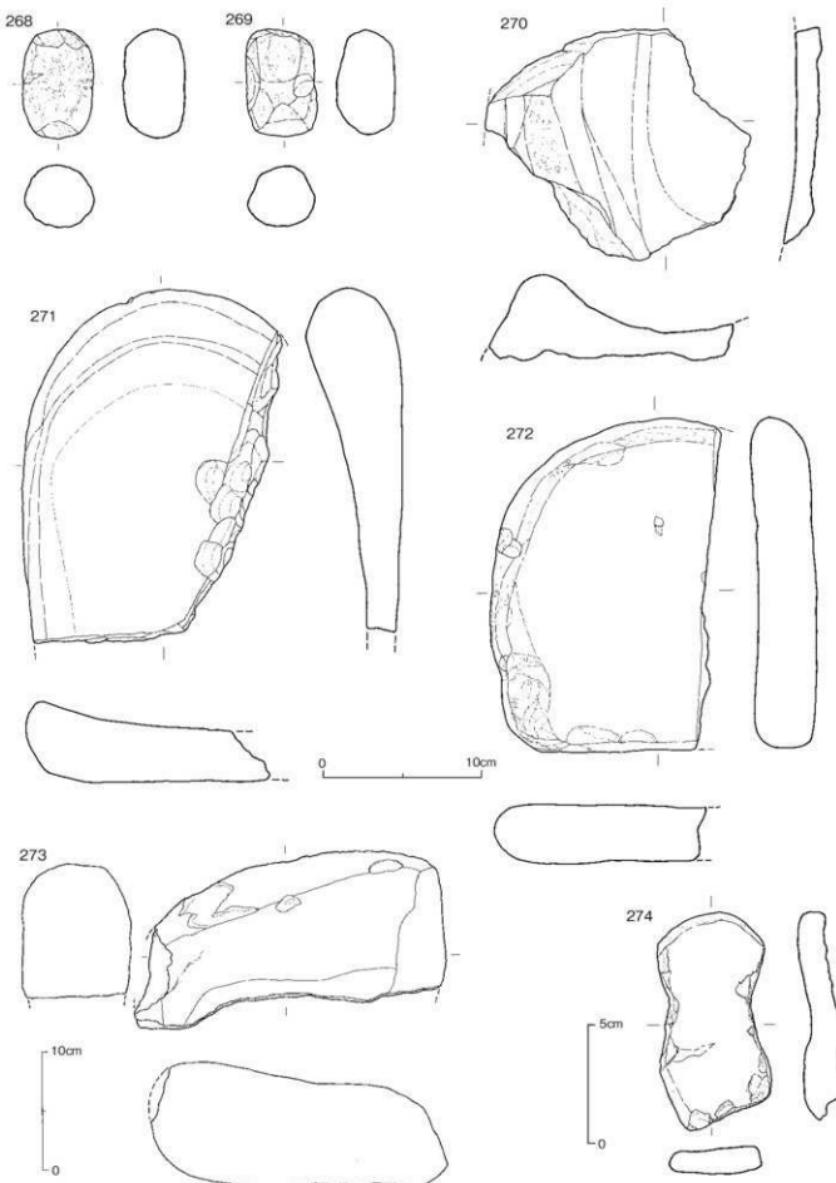
第20図 繩文河川出土遺物実測図11 (1/4)



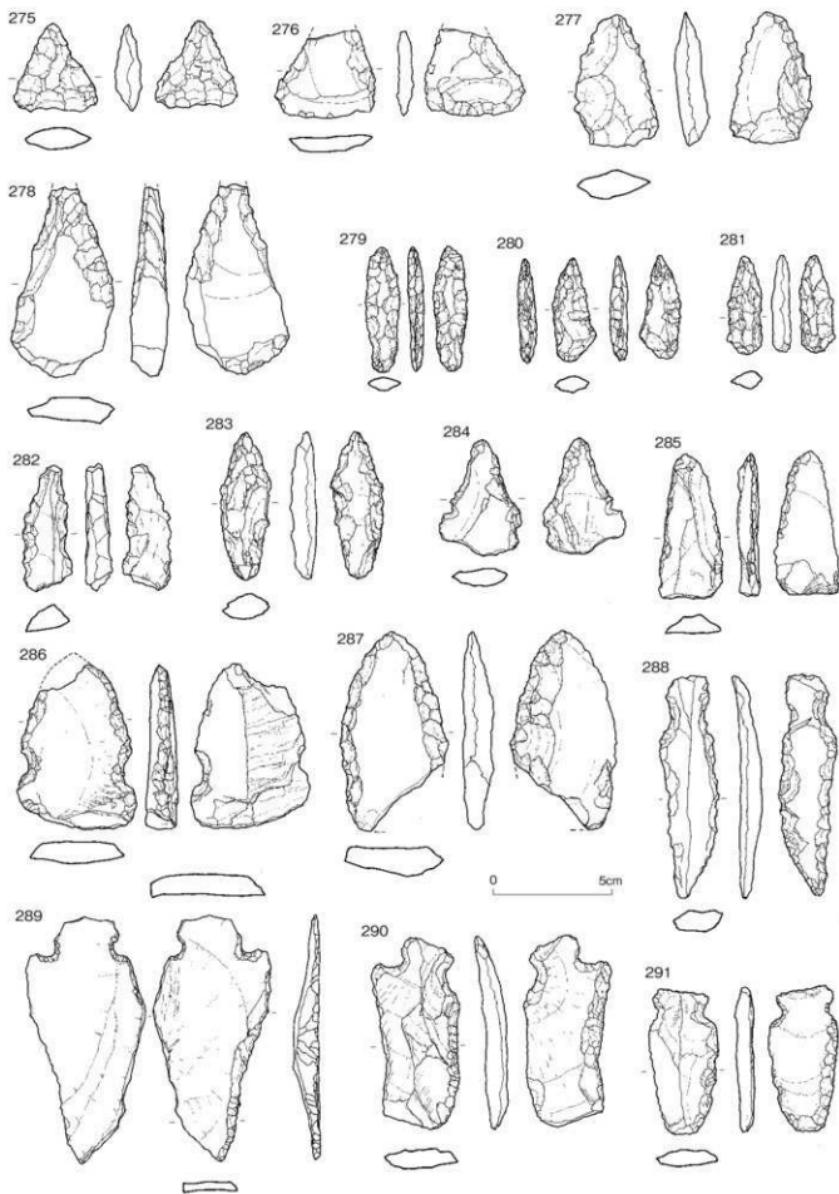
第21図 繩文河川出土遺物実測図12 (1/4・252~256は1/3)



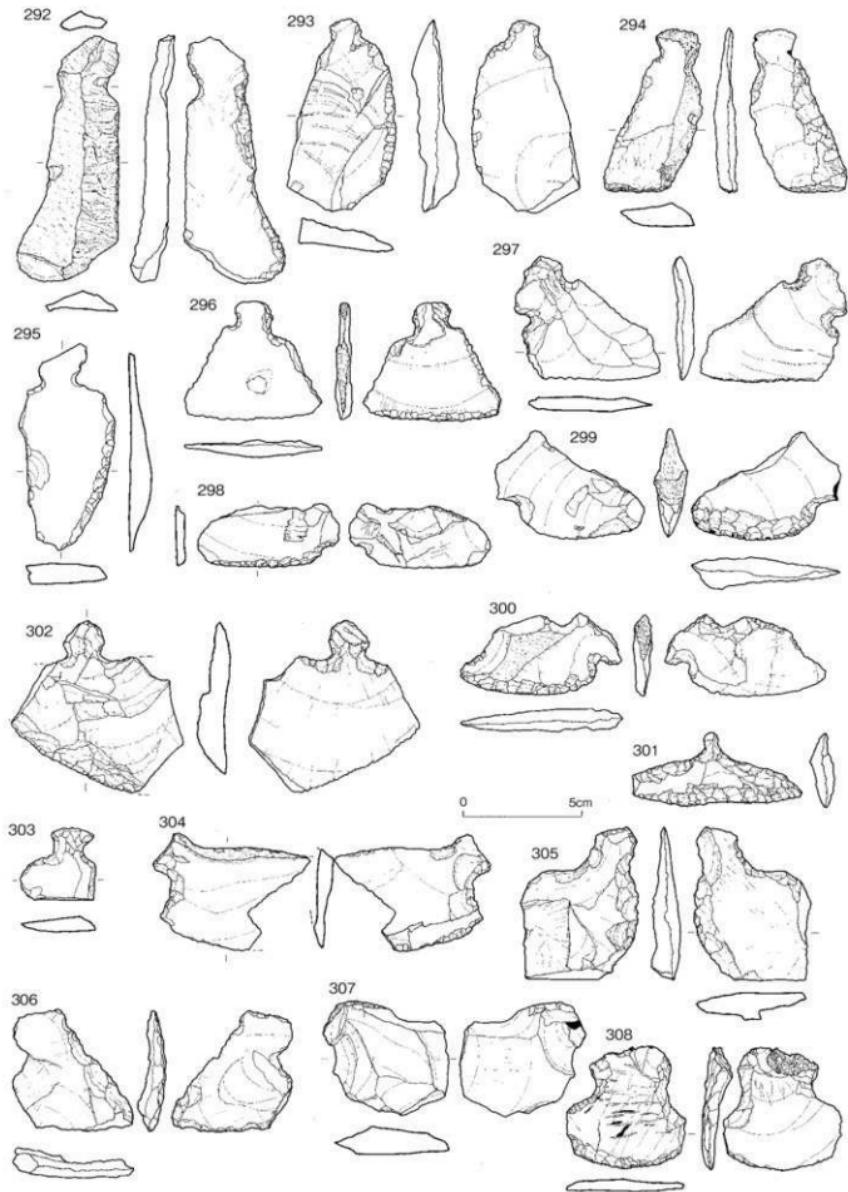
第22図 繩文河川出土遺物実測図13 (1/3)



第23図 繩文河川出土遺物実測図14 (268~272は1/3・273は1/4・274は1/2)

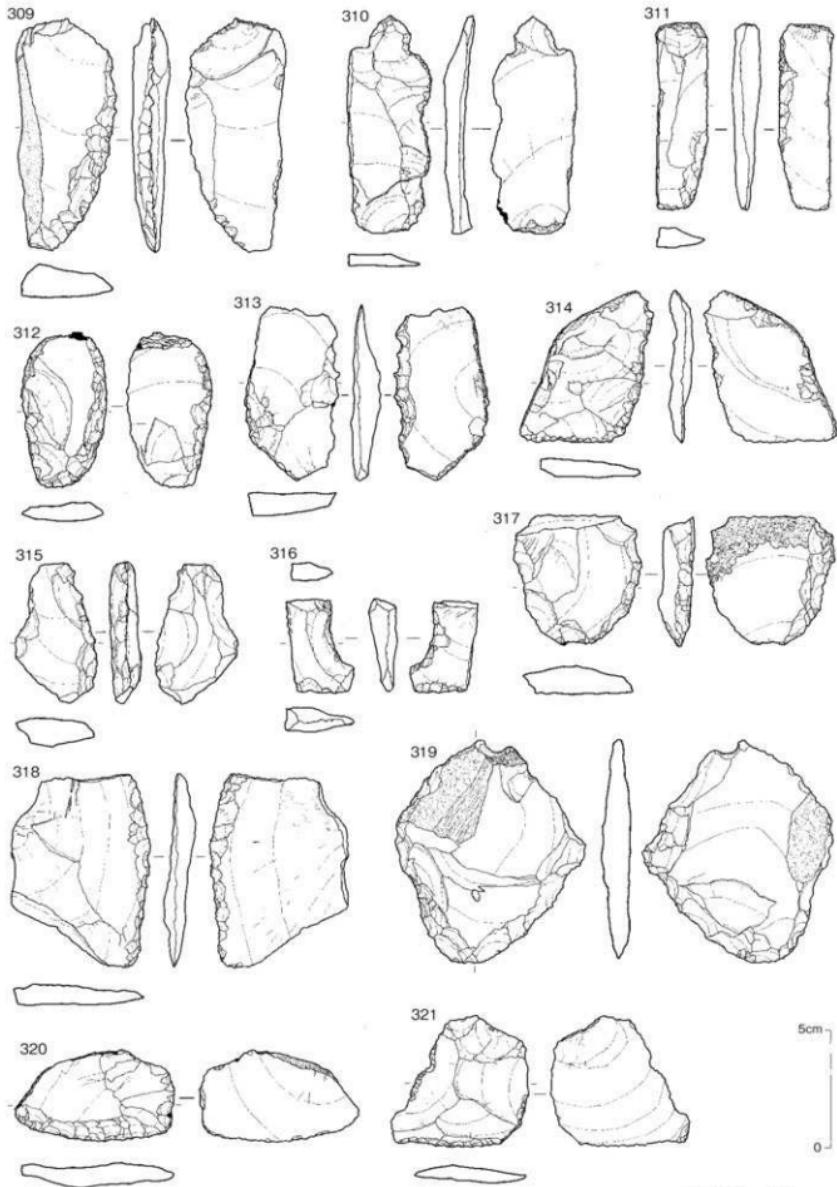


第24図 繩文河川出土遺物実測図15 (275~278は1/1・279~291は1/2)



第25図 繩文河川出土遺物実測図16 (1/2)

\*■は新しい剥離

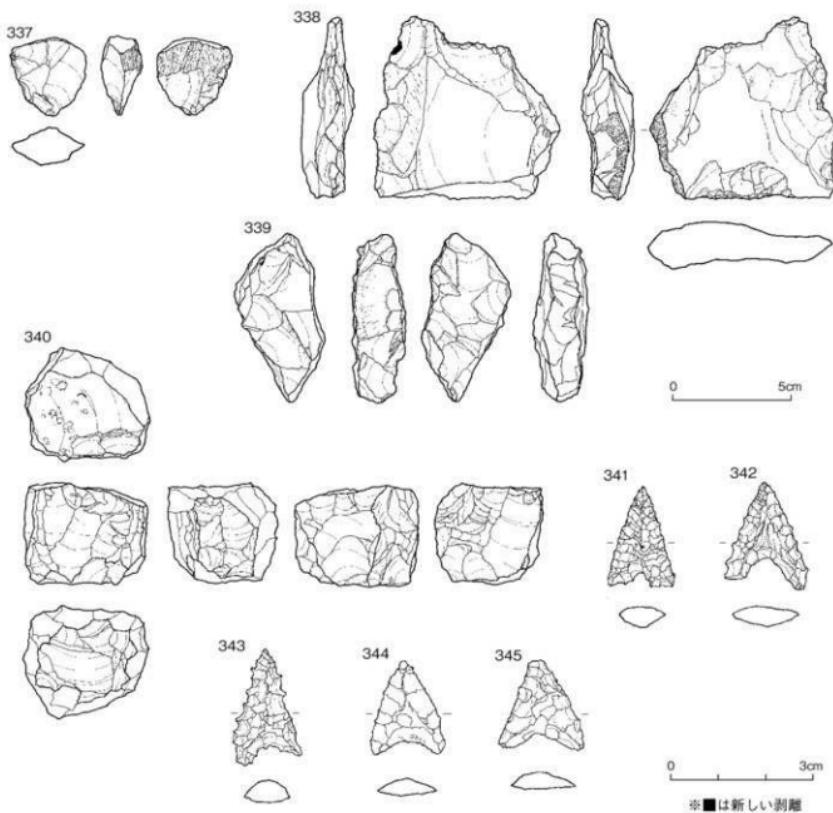


第26図 繩文河川出土遺物実測図17 (1/2)

※■は新しい剥離



第27図 繩文河川出土遺物実測図18 (1/2)



第28図 縄文河川出土遺物実測図19 (337~339は1/2・340~345は1/1)

3) 石器 (第21~33図 252~376)

石器、剥片、原石含めて1000点以上が出土した。内訳はサスカイト・安山岩(表1)、黒曜石(表3)、と砂岩・蛇紋岩等のその他石材(表2)に別けて記す。遺物が出土した河川は握り拳大の礫を含む砂礫層で、調査時に篩選別等は行っていない。旧石器についてはP38~P40に記載しているが、遺物は縄文河川とシルト層上面包含層の両方から出土しており、西側丘陵上に旧石器時代の集落が存在したことを示す。黒曜石についてはP33に報告を記載しているので、ここではサスカイトとその他石材を使用した石器について報告する。252~265は磨製石斧である。252~256は細長いタイプで252と254・255が玄武岩らしき黒くて緻密な石材を使用している。253は蛇紋岩である。257~260は安山岩でやや丸みを帯びる。261~264は蛇紋岩製で261は小型でやや撥型を呈す。262~264は幅広タイプで、264は幅が9.7cmと大型である。265は側面を打ち欠いた他は刃部のみ研磨している。安山岩製である。266も安山岩製で長さ17.8cm、幅12cm厚さ2.4cmと大型である。打製石斧か。268は砂岩製の砥石である。中央に長さ6.3cm、幅6.5mmの研磨用の溝がある。268・269は砂岩製敲石、270~273は砂岩製石皿である。

表1 石器分類表1 (サヌカイト)

種類	点数	%
石鎌	4	1.3%
石鎌未製品	5	1.6%
石鋸	5	1.6%
石槍	5	1.6%
石錐	1	0.3%
スクレイパー	137	44.9%
スクレイパー?	8	2.6%
スクレイパー未製品	1	0.3%
石匙	21	6.9%
石匙?	4	1.3%
石匙未製品?	7	2.3%
石錐?	5	1.6%
両面加工石器	10	3.3%
楔形石器	2	0.7%
削器	1	0.3%
板状素材	3	1.0%
石核	18	5.9%
石核?	4	1.3%
剥片	64	21.0%
破片(數に含めない)	195	
計	305	

274は安山岩製で側面を打ち欠いて抉りをいたした石錐である。275~340はサヌカイト製の石器と剥片である。275~278は石鎌である。278は未製品か。279~287は石槍で、大きさから小形(279~281)、中形(282~285)、大形(286~287)に別けられる。狩猟具であるが中~大形(282~287)は鉛として大型魚類や海獣等の捕獲に使用した可能性がある。288~307は石匙である。縱長型が多く、台形や横長型は少ない。302は破損品、304~307は未製品である。308は石盤状を呈す。刃部を薄く平らにするため表面を丁寧に削った痕跡が残る。309~326はスクレイパーである。5次調査出土の石製品としては最も数が多く、サヌカイト製石器の4割強を占める。形状、大きさとも様々なのは用途による使い分けの結果と考えられる。327~329は両面加工石器、330は楔形石器、331は板状素材である。332は石錐未製品か。333は縱長剥片、334は剥片である。335~340は石核である。335~336は石棒状を呈し、図の横方向から打撃を加えて幅2~4cm程の素材を取っている。一部にこまかなく剥離があり、最後はスクレイパーとして使用した可能性がある。340は石質が緻密でガラス質に近い。上面を平坦に整え、側面で縱長の剥片を取る。341~345は河川西端の窪みから出土した石鎌である。341・342が黒曜石製、343~345がサヌカイト製である。

石器は河川砂礫中から出土したため、石鎌等の小さな石器は見逃しも多いと思われる。石器の用途は石鎌、石槍、石鋸が狩猟。石匙とスクレイパーが動物解体や加工、磨製石斧と石匙・スクレイパーが植物採取。敲石、石皿が実などの加工と多種に及ぶ。祭祀用石器が無く打製石斧が少いものの、狩猟・採取用、加工用など當時使用されていた器種の多くが出土している。石材は蛇紋岩、安山岩、サヌカイトは河川砂礫層の中に多く含まれており、簡単に手に入れることができた。砂礫層にはその他に石炭、石英等を多く含む。黒曜石は腰岳産(佐賀県)が多く、その他に針尾島産(長崎県)姫島産(大分県)が出土しており、北部九州の広い範囲の交流を示している。

#### 4) 植物遺体について

河川底面には緩やかな凹凸があり、そのうち數カ所に植物遺存体が堆積していた。ほとんどは厚さ数mm程度で植物遺存体の残りも良くなかったが、2カ所は植物層の厚さも厚く、遺存状態も良好であった(第5図)。窪みは径が約1.5m(A)と1m前後(B)で、特にAは西側を擾乱で切られるものの、長さ1.5m程の木が1本とその下に厚さ2~10cmの植物遺存体が堆積していたが、そのほとんどは木の葉で、間にドングリ類やその他の実を含んでいた。資料を現地で分類する時間がなかったため植物層を分割してバンケースに入れ、木は加工痕が無いことを確認後に樹種同定用のサンプルを採取した。持ち帰った植物遺存体はビンセットで葉を1枚ずつはがして資料を採取した。葉は脆弱で多くが剥がす段階で細片化したが、大きな破片を埋蔵文化財センターに運んで1枚ずつパックして保存した。葉の採取時に編組の断片が7点出土した。これら編組と植物遺存体については株式会社パレオ・ラボの佐々木由香氏の分析を記載している(P41~49)ので参照頂きたい。

4 小結

5次調査では上面で古代の遺構が、黄灰褐色シルト層下で縄文時代前期後半～後期初頭の河川が出土した。上面では古代の遺構を切る土坑からも弥生土器しか出土しない遺構が多く、遺構・遺物一覧表で弥生時代時代の遺物しか出土していない遺構でも弥生時代と判断することは難しく、その多くは古代以降に降るものと思われる。上面で出土した遺構は溝と土坑、掘立柱建物4棟であるが、溝は直線に近く、方位は南北から東に10°～12°ズレる。時期は8世紀中頃～後半と思われるが、1次調査や4次調査で出土した古代の遺構は7世紀から8世紀前中頃とされており、時期的には若干のズレがある。

縄文時代の河川から出土した土器は多くが前期後半の轟B式土器と曾畠式土器で、わずかに中期前半や早期の土器片を含む。河川の埋没時期は出土した編組のC14年代が縄文時代前期中頃と中期中頃を示すことから、中期中頃まで降ると考えられる。前期の遺物は上流側にあった遺構が流れに削られて混入したものと思われる。しかし、土器表面にほとんど摩滅が見られず炭化物が付着したままの土器片も多いことを考えると、遠く流されたとは思えず5次調査の南側に前期の集落や貝塚が埋没している可能性がある。丘陵の際には後世の流路があるため削られて残っていない可能性もあるが、縄文時代前期の土器片がまとまって出土することは珍しく今後の周辺の調査に期待したい。

表2 石器分類表2（その他石材）

	总数	砂 岩	玄武岩?	花崗岩	安山岩	蛇紋岩	泥 岩	その他-不明
磨製石斧	106	11	10%	42	40%		8	8 %
打製石斧		2				1	50%	1
石 盆		9	8	90%		1	10%	1
凹 み 石		2	2	100%				
敲 石		11	2	19%		5	45%	4
砥 石		3	3	100%				

表3 遺構・遺物一覧

\*1001~1117は黄灰褐色シルト層上面で検出した遺構



### III 中村町5次調査の黒曜石石器群について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課 板倉 有大

本調査出土の黒曜石石器群は、シルト層の上層出土と下層出土に分けられる。上層と下層の石器群の原石・石核・剥片のサイズを比較したのが第29図である。下層石器群が1辺5cm以上の一群を含むのに対し、上層石器群は4cm以下に収まるという明瞭な法量差が認められる。伴出土器から下層石器群は縄文時代前期後半、上層石器群は弥生時代を主体とする時期である。上層石器群への下層石器の混入もみられるが、量は多くはないと考える。

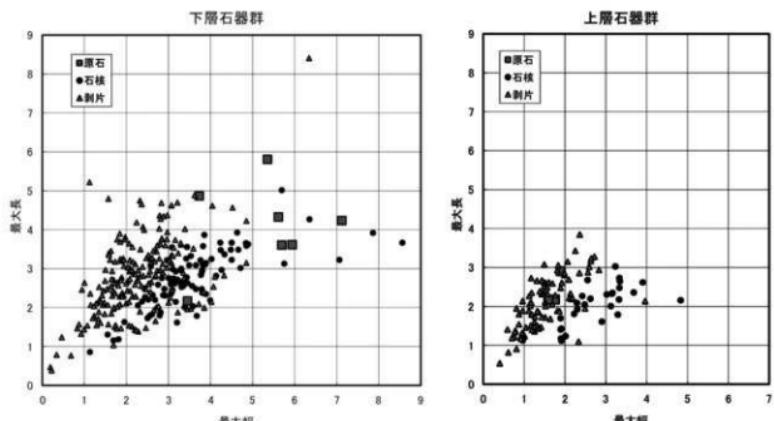
表4に下層・上層石器群の器種組成を示す。下層石器群は総数334点、総重量3728.4gが出土した。原石・石核・剥片等の石器素材が90.7%を占める。1割程度の剥片石器については、打製石鏽（うち未成品1点）、尖頭状石器（未成品）などの狩猟具（19%）と石錐・楔型石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片などの軟質物（草木・皮・骨など）加工具（81%）で構成される。上層石器群は総数139点、総重量424.63gが出土した。石器素材が87.8%を占め、剥片石器は下層石器群ほど加工工具が目立たず、表探資料も含めて石鏽が多い。以下では、下層石器群の主要石器について報告を行う（第30・31図）。下層石器群の未図化資料については計測表（表5）を参照されたい。

346~349は打製石鏽で、二等辺三角形凹基鏽（346・347）、二等辺三角形有脚鏽（349）、正三角形有脚鏽（348）に分類でき、前後面への丁寧な押圧剥離で成形される。350は石錐で、1辺3~4cmの剥片の側辺末端を刃部に加工し、基部は剥片形状をいかす。刃部の摩滅等は顕著でない。351は光沢のない灰黒色黒曜石製の石錐で、小型剥片の打点側を刃部とし、基部には片面調整を施す。刃部は摩滅している。352は下辺を片面二次加工した搔器で、刃先角は55度を測る。刃端部に片面微細剥離が認められる。前面には不純物が多くみられ、後面・右面には角礫自然面を残す。前面・左面・上面に加熱によると考えられる破裂痕がみられる。353は縦長剥片の下辺を片面二次加工した搔器で、刃先角は60度を測る。刃端部に片面微細剥離が認められる。354は円盤状石核で、後面には礫面を残す。剥離面の長さは2~3cm、剥離角は70~90度で、交互剥離を基本的な剥離進行とする。355は楔形の小型石核で、剥離面の長さは2cmほど、剥離角80~90度を測り、並列剥離を基本とする。356は幅広な剥片で、平坦打刃からの剥離角は130度を測る。光沢のある灰黒色黒曜石である。

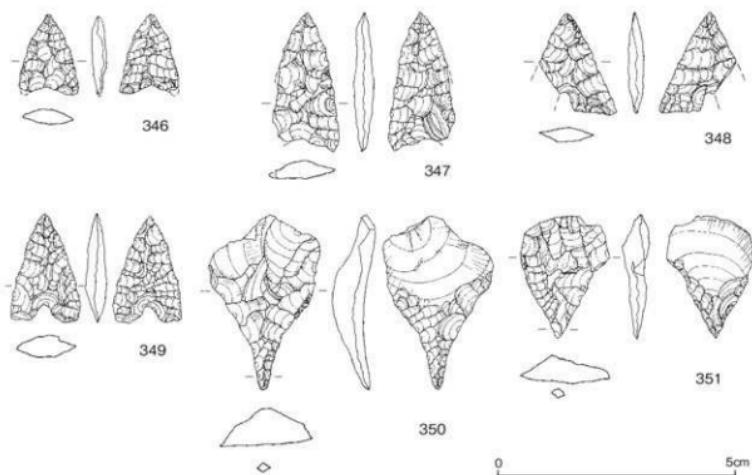
その他、下層石器群の石器素材について整理する。原石は1辺3~7cm、石核は1辺1~9cm、剥片は1辺0.2~9cmの範囲を示し、1辺3~5cmの中型石核・剥片を主体としながら、6~9cmの大型品も残されている。大半は腰岳産黒曜石であるが、針尾島や牟田の灰黒色黒曜石や船島産黒曜石など腰岳産以外の黒曜石も1割に満たない程度に含まれる。1辺2cm以上の剥片の長幅比平均値は1.33とやや縦長で、長さ4cm・幅3cmほどの幅広剥片の作出が典型と言える。石核は円盤状・楔形・多面体がみられ、剥片剥離前調整は頭部調整程度で、入念な打面調整は行わない交互剥離を基本とする。また、内部から破裂して割れた礫、剥片が1割に満たない程度に出土しており、加熱による素材分割と考えられる。

表4 黒曜石石器群の器種組成

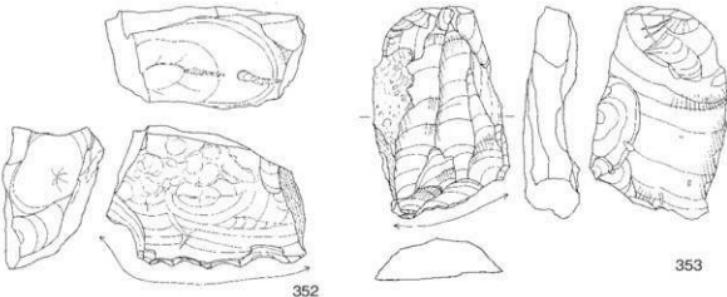
		石鏽	尖頭状石器	石錐	楔型石器	スクレイパー	二次加工剥片	使用痕剥片	原石	石核	剥片	計	総重量g
下層	点数	5	1	2	4	7	6	6	7	93	203	334	3728.4
	%	15	0.3	0.6	1.2	2.1	1.8	1.8	2.1	27.8	60.8	100.0	
上層	点数	11	-	-	-	-	2	4	3	28	91	139	424.63
	%	7.9	-	-	-	-	1.4	2.9	2.2	20.1	65.5	100.0	



第29図 黒曜石石器群の最大長・最大幅

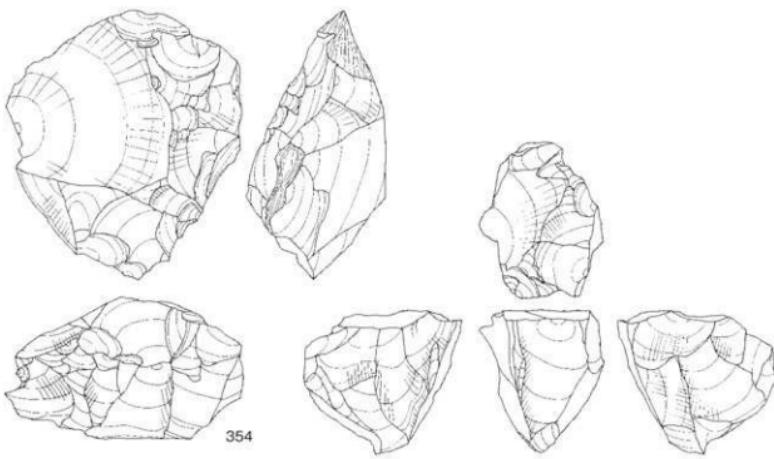


第30図 縄文河川出土遺物実測図21 (1/1)



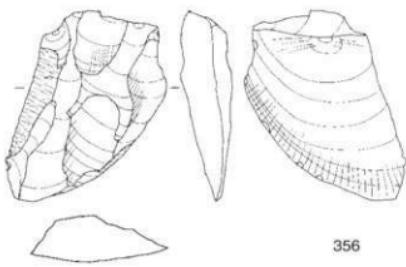
352

353



354

355



356

0

5cm

第31図 繩文河川出土遺物実測図22 (1/1)

表5 下層黒曜石器群計測表

\*11-194, 240-262 1区, 196-261, 303 2区, 262-329 3区 ■船大長・幅・厚さcm. 重量はg

No	形種	船大長	船大幅	船厚度	重量	標号	No	形種	船大長	船大幅	船厚度	重量	備考
14	石鏟	1.7	1.26	0.33	0.5	米原0346	106	石片	3.35	3.02	0.63	8.5	
15	石鏟	2.9	1.38	0.43	1.4	米原0347	107	石片	3.54	3.12	0.68	9.2	牛糞rob
16	石鏟	2.1	1.56	0.26	0.7	米原0348	108	石片	3.26	2.96	0.65	5.6	
17	スクレイパー	5.22	2.43	1.19	13.1	抹刮	109	石片	3.75	2.83	1.16	8.1	
19	石鏟	2.55	1.84	0.55	1.6	米原0351	110	石片	4.37	2.79	1.5	13.2	
20	石鏟	3.68	2.33	0.78	3.9	米原0350	111	石片	4	2.62	0.91	8.7	
25	丸頭状石器	3.27	1.32	0.4	1.9	4.6萬両鑄. 未成品	112	石片	2.79	4.1	1.14	12.3	
30	石核	3.23	2.06	1.78	33.9	灰黑色rob	113	石片	2.41	3.84	1.14	10.3	
31	石核	3.67	4.23	2.65	41.3		114	石片	1.96	3.05	1.35	7.6	
32	石核	3.09	3.65	2.74	28.1		115	石片	3.44	2.72	1.39	11.2	
33	石核	2.68	3.38	2.29	19.5		116	石片	2.51	2.43	0.42	2.1	
34	石核	3.67	8.56	2.22	86		117	石片	2.88	2.17	0.87	5	
35	原石	4.87	3.73	3.54	74.8	単円rob	118	石片	2.54	4.07	1.03	6.9	
36	洞片	4.57	4.52	1.23	29.1		119	使用肌洞片	3.41	2.06	0.67	33	縫隙利用
37	石核	2.97	4.26	2.16	21	単円rob	120	石片	3.16	2.57	0.82	5.3	
38	石核	3.87	3.86	2.07	25.3		121	二次加工洞片	3.26	2.79	1.32	87	晶子船日立
39	石核	2.63	3.45	2	22.1		122	石片	2.29	2.87	1.15	6.7	
40	石核	3.22	3.76	2.63	27.6		123	石片	2.95	2.73	0.68	3.9	
41	石核	3.48	4.24	2.54	29.1		124	石片	3.81	1.97	1.21	5.4	
42	石核	2.68	3.24	2.48	17.7		125	石片	2.66	2.59	0.5	2.6	
43	原石	4.24	7.12	3.85	133.1	単円rob	126	石片	3.01	2.68	0.99	4.4	
44	石核	2.21	2.52	1.23	7.9		127	石片	3.18	1.73	0.62	3.4	
45	原石	2.17	3.45	2.14	16.9		128	石片	2.96	2.28	0.74	4	
46	石核	2.96	3.29	2.3	23.1	熱研碎	129	石片	3.27	1.92	1.03	5.1	
47	洞片	2.49	3.35	1.22	12.5	単円rob	130	石片	3.25	1.85	0.79	3.8	
48	使用肌洞片	3.39	1.55	0.88	39	縫隙利用?	131	石片	2.56	2.35	0.69	3.1	
49	洞片	3.78	2.84	1.44	16.5		132	石片	2.94	2.56	0.65	5	
50	石核	3.15	3.89	2.9	25.2		133	石片	2.47	2.47	0.74	5.2	
51	石核	2.56	3.56	1.91	19.4		134	石片	2.93	2.07	0.73	4.1	
52	石核	3.22	2.96	1.44	14.2		135	石片	2.73	2.26	2.67	4	
53	石核	3.07	2.98	2.15	14.2		136	石片	3.07	1.94	0.74	4.9	
54	石核	1.83	2.61	1.58	9.6		137	石核	1.63	1.95	0.78	2	
55	石核	2.32	2.87	2.11	10.3		138	石片	3.05	2.38	0.73	3.8	
56	石核	2.16	2.37	1.59	7.7		139	石片	2.39	1.7	0.83	2.7	
57	石核	2.27	2.44	0.88	4.2		140	石片	2.74	1.86	0.55	2.8	
58	石核	3.02	4.71	1.21	18.4		141	石核	2.31	2.92	1.13	6.7	
59	石核	3	3.3	2.6	21.2	米原0355	142	石片	3.75	1.78	0.6	3.8	
60	石核	2.84	3.77	2.33	28.3		143	石片	2.74	2.08	1.36	6.1	
61	石核	2.01	3.38	1.82	13.7	熱研碎	144	石片	2.86	2.21	0.72	3.4	
62	石核	2.48	2.9	1.99	16.8		145	石片	2.11	1.99	0.57	2.3	
63	石核	1.79	2.55	1.67	8.5		146	石核	2.19	3.99	1.12	4.4	
64	石核	1.8	2.79	1.5	8.6		147	石片	3.23	1.61	0.8	3.4	
65	使用肌洞片	3.72	3.48	1.55	17.4	縫隙利用	148	石片	3.9	1.84	0.73	3.4	
66	スクレイパー	3	3.97	1.04	13.1		149	石片	5.22	1.12	0.8	3.5	
67	洞片	3.52	3.59	0.85	10.4		150	石片	2.26	3.04	0.74	4.2	
68	洞片	3.74	3.16	1.36	12.3		151	石片	3.2	1.88	1.02	3.8	
69	スクレイパー	3.77	3.44	1.18	11		152	石片	3.56	2.14	0.66	3.2	
70	石核	2.78	3.43	1.16	10.3	単円rob	153	石片	3.46	1.63	0.66	2.6	
71	洞片	2.83	4.32	0.53	6.5		154	石片	2.97	1.5	0.87	4.2	
72	洞片	3.12	2.86	0.68	4.1		155	石片	1.66	2.69	0.82	3.1	
73	洞片	3.29	2.56	0.75	5.6		156	石片	2.3	1.66	0.81	2.1	
74	石核	2.01	2.74	0.98	5.9		157	石片	2.72	1.69	0.47	1.6	
75	石核	1.62	3.2	1.07	3.8		158	石片	2.37	1.73	0.8	2.5	
76	洞片	2.68	2.03	0.84	4.4		159	石片	2.64	1.78	0.62	1.8	
77	洞片	1.97	3.53	0.56	4		160	石片	2.69	2.27	0.39	11	
78	石核	4.27	6.35	1.2	31.2		161	石片	2.29	1.87	0.86	3.1	
79	石核	2.2	2.68	0.11	6.4		162	石片	2.08	1.85	0.39	1.3	
80	スクレイパー	3	4.2	1.84	26.1	米原0352, 热研碎	163	石片	2.53	1.35	1.14	2.5	
81	洞片	3.62	3.3	0.77	10		164	石片	2.29	1.84	0.47	1.8	
82	洞片	3.15	3.07	1.19	11.3		165	石片	2.08	1.84	0.66	2.2	
83	スクレイパー	4.45	2.85	0.89	13.3	米原0353	166	石片	2.7	1.87	0.24	1.1	
84	洞片	2.85	2.53	0.68	4.2		167	石片	1.9	2.32	0.51	1.9	
85	洞片	2.29	2.22	0.63	2.9		168	石片	1.52	2.13	0.5	1.3	
86	洞片	3.15	4.85	0.64	8.7		169	石片	2.62	1.72	0.43	1.6	
87	櫛型打削	1.83	1.33	0.66	1.8		170	石片	2.07	1.56	0.51	0.9	
88	洞片	4.02	3.29	1.37	14.7		171	石片	1.71	1.33	0.48	0.9	
89	洞片	4.38	2.97	1.31	18.3		172	石片	1.57	1.57	0.4	0.8	
90	石核	2.04	3.58	2.09	15.4		173	石片	1.61	1.38	0.88	1.6	
91	洞片	4.08	2.39	0.71	5.7		174	石片	1.45	2.22	0.47	1	
92	洞片	1.94	2.65	0.78	3		175	石片	1.44	2.2	0.17	0.4	
93	洞片	3.44	2.7	0.93	6.4		176	石片	1.97	1.69	0.29	0.7	
94	洞片	2.77	3.37	0.87	5.4		177	石片	1.55	1.29	0.36	0.6	
95	洞片	2.28	1.89	0.69	3.4		178	石片	1.79	1.21	0.35	0.5	
96	石核	1.88	2.81	1.22	5.9		179	石片	1.44	0.99	0.59	0.6	
97	石核	3.93	4.63	1.2	16.6	热研碎	180	石片	1.47	1.87	0.49	0.9	
98	石核	3.13	5.75	2.08	23.1		181	石片	1.51	1.72	0.39	0.9	
99	洞片	4.62	4.04	1.29	24.6	単円rob	182	石片	1.48	2.46	0.59	2	
100	石核	3.49	4.66	1.44	18		183	石片	2.46	0.94	0.41	0.2	
101	石核	2.72	3.21	1.42	14.4		184	石片	1.54	1.07	0.38	0.7	
102	洞片	4.35	2.88	1.01	8.8		185	石片	1.55	1.74	0.71	1.5	
103	洞片	3.4	3.23	0.81	8.5		186	石片	2.11	1.28	0.3	0.7	
104	洞片	4.19	2.24	1.99	10		187	石片	1.89	1.34	0.34	0.7	
105	洞片	2.8	2.68	0.95	6.5		188	石片	1.04	1.69	0.54	0.6	

No.	部種	最大幅	最大厚	重 量	備 考
189	調片	133	0.92	0.49	6.6
190	調片	264	1	0.27	0.7
191	調片	236	1.14	0.25	0.5
192	調片	147	0.83	0.31	0.4
193	調片	157	0.87	0.16	0.1
194-1	調片	124	0.46	0.22	
194-2	調片	0.77	0.68	0.1	
194-3	調片	0.79	0.34	0.21	
194-4	調片	0.47	0.19	0.5	
194-5	調片	0.39	0.22	0.13	
195	石巖	224	1.45	0.45	0.8 実測4349
196	調片	841	6.34	2.23	90.4
197	石核	226	2.84	2.42	24.5
198	石核	3.35	4.02	2.38	23.6
199	石核	264	3.32	2.61	29.2
200	石核	3.09	3.49	2.3	23.9
201	石核	3.33	3.53	2.87	24.4
202	石核	291	3.79	1.16	13.8
203	石核	297	3.8	1.19	15.1
204	石核	326	3.42	1.74	17.8
205	石核	248	3.65	1.79	12.1
206	石核	293	3.17	2.46	20.6
207	石核	311	3.87	1.53	15.1
208	石核	248	3.79	1.76	12.6
209	石核	259	3.31	1.69	11.7
210	石核	261	3.05	1.2	8.1
211	石核	226	3	0.92	7.4
212	石核	236	3.06	1.26	11
213	石核	206	2.27	1.77	8.1
214	調片	322	2.08	1.02	6.5
215	石核	3.66	4.84	2.85	51.9
216	石核	297	3.8	2.75	36.8
217	石核	253	3.31	1.84	15.7
218	石核	269	3.12	2.43	19.9
219	石核	359	4.85	1.93	31.8 熱破碎
220	一次加工調片	309	2.59	0.98	6.2 接触利用
221	調片	335	2.52	0.9	6.3
222	スケレイバー	29	1.8	0.56	2.4 石核内部の可塑性
223	楕円石型	342	2.69	0.84	6.7
224	柳葉石器	242	1.86	0.83	2.6
225	調片	312	2.21	1.35	7.1
227	調片	321	3.02	1.34	12.6
228	調片	319	2.67	0.97	6.2
229	調片	255	1.63	0.68	1.6
230	一次加工調片	234	2.22	0.81	4.3
231	調片	228	1.9	0.72	2.4
232	石核	363	4.89	2.42	34.7
233	調片	364	2.8	1.29	11.5
234	調片	394	2.97	0.99	10.3
235	調片	366	3.29	1.33	10.7
236	調片	469	2.83	1.03	9.4 実測4356
237	調片	333	3.1	0.86	6.2
238	調片	376	2.96	0.97	6
239	調片	428	2.81	1.02	7
240	調片	475	2.32	0.82	6.7
241	調片	327	2.47	0.97	6.9
242	調片	3.5	2.33	0.85	4.3
243	調片	263	2.53	0.83	4.1
244	調片	296	2.14	0.86	4.2
245	調片	213	3	1.67	4.6 針尾馬rob
246	調片	304	2.03	0.33	2.2
247	調片	369	1.85	0.58	4.1
248	調片	241	2.57	0.92	4.5
249	調片	243	2.09	0.31	1.2
250	調片	273	1.64	0.45	1.6
251	調片	231	1.93	0.55	2.9
252	調片	294	1.66	0.51	2.5
253	調片	259	2.2	0.41	1.7
254	調片	248	1.54	0.45	1.7
255	調片	34	1.58	0.39	1.6
256	調片	201	1.7	0.52	1.7
257	調片	146	1.77	0.72	1.4
258	調片	185	1.64	0.49	1.3
259	調片	207	1.15	0.49	0.9 計尾馬rob
260	調片	139	2.28	0.88	2
261	調片	154	2.06	0.34	0.7
262	石核	179	3.67	1.29	12.6 滑面崩壊?
263	二次加工調片	334	1.69	0.73	3.7
264	石核	392	7.86	2.46	66.8
265	原石	361	5.69	3.24	65.8 热破碎
266	原石	362	5.94	3.12	67.6 热破碎
267	石巖	195	1.94	0.33	1.2 正三角形錐末品
268	石核	502	5.69	2.9	56.4 実測4354
269	石核	356	3.44	3.26	50.8
270	原石	5.81	5.35	5.04	1.796
271	石核	3.49	4.48	3.05	52.9 热破碎
272	調片	4.89	3.62	1.81	20.6
273	石核	2.35	3.89	1.31	10.6 热破碎
274	石核	3.12	3.81	1.73	20.1
275	石核	3.55	3.68	2.1	22.5
276	石核	3.67	4.5	1.8	25.3 半尾馬
277	石核	3.58	3.82	2.01	27.5
278	石核	2.99	3.1	2.56	26.6
279	石核	2.82	4.13	2.27	26.3
280	石核	2.59	2.75	2.53	24.4
281	石核	3.37	4.33	1.5	18.9
282	石核	2.73	3.14	1.98	18.1
283	石核	2.46	3.09	1.36	12.3
284	石核	2.56	3.35	2.11	15.8
285	石核	2.75	3.12	2.4	19
286	石核	2.15	3.17	1.83	14
287	石核	2.62	3.15	1.27	9.6
288	使用痕調片	3.5	1.69	0.48	23 斧刃利用
289	スケレイバー	3.75	2.67	1.01	8.4
290	二次加工調片	2.88	2.29	0.82	5.1
291	調片	2.32	1.87	0.82	2.4
292	調片	1.88	3.22	0.59	29 調尾馬
293	調片	3.75	1.95	0.51	32 風化鉄
294	調片	3.65	2.06	0.61	4.6
295	調片	2.07	1.44	0.81	27 風化鉄
296	調片	2.31	1.42	0.33	0.9 風化鉄
297	調片	2.15	4.02	0.42	28 斧尾馬rob
298	調片	2	3.85	0.67	4
299	調片	4.23	4.85	1.13	19.7
300	使用痕調片	3.02	5.01	1.2	16.7 斧刃利用
301	楔型石型	2.59	2.48	0.93	6.4
302	調片	4.66	2.36	0.78	7.4
303	調片	3.6	2.92	0.94	8.4
304	調片	3.6	2.73	0.97	8.5
305	調片	3.26	2.78	0.92	9.4 热破碎
306	調片	3.03	2.96	1.2	9.7
307	調片	2.81	2.32	0.82	4.8
308	調片	3.46	2.64	0.8	4.9
309	調片	2.6	2.53	0.96	6.9
310	調片	2.46	3.08	1.23	6.1
311	調片	3.23	1.94	1.13	6.9
312	調片	2.1	2.72	0.66	3.6
313	調片	2.04	2.76	1.14	6.4
314	調片	2.82	2.4	0.6	3.8
315	調片	2.28	1.9	1.16	4.8 热破碎
316	調片	2.39	2.11	0.71	3.4
317	石核	1.73	2.5	1.04	4.5
318	調片	2.96	2.12	0.66	2.8
319	調片	3.36	1.58	0.42	2.1
320	調片	2.15	2.06	0.77	2.3
321	調片	2.84	2.49	0.57	2.8
322	調片	2.69	1.49	0.72	2.3
323	調片	2.44	2.02	0.53	1.6
324	調片	2.44	1.78	0.79	2.7
325	使用痕調片	3.11	1.48	0.4	16 斧刃利用
326	調片	1.84	1.48	0.43	1.1
327	調片	2.13	1.47	0.53	1.6
328	調片	2.62	1.99	0.54	1.9
329	調片	2.2	1.36	0.39	0.8
330	調片	2.44	1.45	0.44	1.7
331	石核	1.19	1.81	1.19	2.2 热破碎
332	石核	1.31	1.56	1.08	2.5 热破碎
333	石核	0.86	1.13	0.77	0.8 热破碎
334	調片	2.15	1.39	0.24	0.7
335	石核	1.16	1.69	0.82	1.2
336	調片	2.04	1.23	0.55	0.9
337	調片	4.03	2.78	0.68	7.3 黑褐色, 風化鉄
338	調片	3.18	2.15	0.6	3.5 黑褐色, 風化鉄
339	調片	2.57	1.81	0.47	1.8 黑褐色, 風化鉄
340	調片	4.63	3.07	1.94	17.2
341	調片	3.28	2.61	0.72	5.5
342	調片	2.28	2.21	0.64	2.1
343	調片	2.03	1.79	0.45	1.5
344	石核	3.23	4.5	1.86	26.4
345	石核	2.38	3.28	1.58	16
346	石核	2.33	2.62	1.97	16.1
347	調片	4.8	1.57	0.58	4.4 風化鉄
348	スケレイバー	3.91	3.28	1.02	12.4
349	調片	1.42	2.23	0.77	1.9
350	調片	4.7	3.21	1.44	18
351	調片	2.96	2.28	0.88	7
352	調片	1.73	1.2	0.18	0.4 針尾馬rob
353	原石	4.33	5.61	3.13	9.47

## IV 中村町5次調査の旧石器時代資料について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課 吉留 秀敏

本調査では22点の旧石器時代から縄文草創期に所属する石器類が検出された。何れも表面の風化や摩滅が著しく、観察や実測困難なものもある。ここでは碎片等を除き17点を報告する。

358は小型のナイフ形石器である。打面両設の縱長剥片の打点部を基部とした二側縁調整である。先端を欠損するが、復元長約3.5cm、幅1.3cmである。形態と基部調整から「茂呂型」に類似する。359は縱長剥片であり、先端両側に縦面があり、角礫の隔壁から剥離が開始されたことがわかる。360～363は寸詰まりで厚手の縱長剥片であり、360は稜部からの調整があり「クレスト技法」の手法が用いられている。361～363には片側に縦面があり、石核調整を兼ねていたとも考えられる。364、365は横長剥片であり、366は横長剥片石核である。このうち、364は安山岩(サヌカイト)製で背面に盤状剥片の素材面を残した連続剥離が予測できる剥片であり、「瀬戸内技法」との関連も指摘される。366は扁平な黒曜石小礫に僅かな打面、石核調整を施し、少数の横長剥片を剥離したものであり、連続性は考え難い。368は細石刃核の母核(コア・ブランク)とみられ、作業面には打痕が多く認められる。369、370は不整形ながら細石刃核であり、背面や側面に縦面が残るものであり、「野岳・休場型」に含めるべきか。371～373は細石刃状の剥離が認められた不定形剥片である。作業面の再生剥片か。何れにも縦面、主剥離面が残り、小礫や分割礫を素材としていることがわかる。371、372は細石刃核打面形成時の崩片(スポール)である。二点共に両面加工品から剥出されており、第一次崩片(ファースト・スポール)であるにも関わらず、背面が平坦調整である。母核が接線を有する断面凸レンズ状の「福井型」の形態ではない。断面は逆三角形に近く、調整された甲板面を有する船底形の母核形態と推定される。

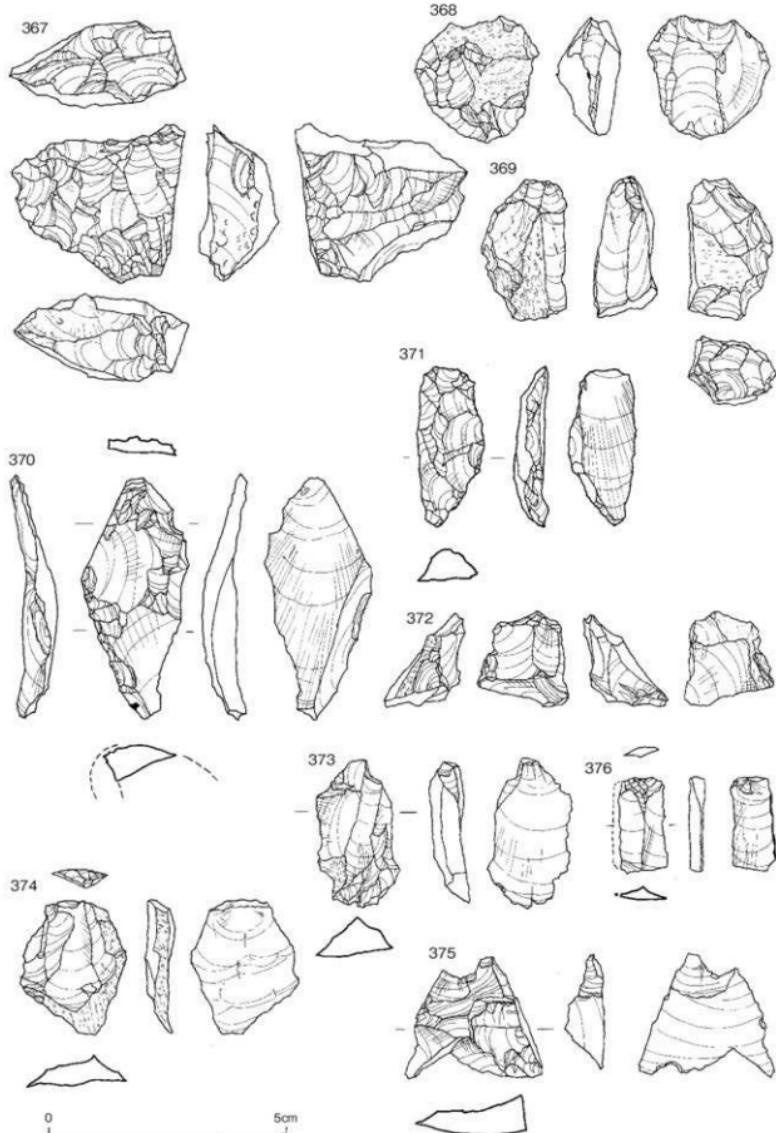
今次調査では少量の旧石器時代の石器類が出土した。何れも更新世堆積物内に安定して包含されたものではなく、大半は縄文時代遺物と共にシルト層下部の粗砂層内に拡散して出土した。調査地点は標高約10mであり、周囲から複数の丘陵が集約し、若久川などの小河川も合流する位置にあたる。更新世以降の温暖化による沖積地形成で、こうした場所には三角州的な堆積物や包含層が形成されたとみられる。周辺に存在した旧石器時代遺跡もさまざまな要因で破壊され、遺物がこうした包含層内に混在したと考えられる。しかし、上記したようにその内容はさまざまな時期の多様な石器群の分散、混在ではなく、ある程度のまとまりが認められるものであった。こうした出土状況は二次的埋没とはいえ本来の本地域の人為活動的一面を反映している可能性があろう。そのため石器群の一括性については今後も十分検討する必要がある。

ところで、石器群は少ない資料ではあるが、おおよそ新旧2時期に区分される。まず、ナイフ形石器を有する石器群であり、次に細石刃石器群である。ナイフ形石器を含む石器群には、小型の「茂呂型」類似のナイフ形石器と、縱長、横長二種の剥片剥離技術が把握できた。縱長は「クレスト技法」を用いた小型端正な縱長剥片剥離が、横長には「瀬戸内技法」の影響が残る技術が把握できた。少数の資料とはいって、縱長、横長剥片剥離技術が異なる石器群とは考え難く、同一の石器群の技術体系を見るべきであり、こうした様相からその時期は後期旧石器後半期でも新相に近い段階と見られる。

細石刃石器群は広義の「崩片系」石器群に含まれる。しかし、典型的な両面加工石器から実施される「崩片系」細石刃核ではない。典型例は市内に博多区篠原2次、西区元岡3次、小田C2次調査例などがあることから、けっして地域的較差ではない。したがって本遺跡の細石刃石器群が「崩片系」細石刃石器群の技術組成の一部であるとしても、そのいずれかの位置、時期にある石器群であるのか。つまり後期旧石器時代終末から縄文時代草創期前葉のどこにあたり、どういう系譜で理解されるのかなど、その評価と詳細は今後の類例を待って検討したい。



第32図 旧石器遺物実測図1 (1/1)



第33図 旧石器遺物実測図2 (1/1)

## V 中村町遺跡第5次調査出土植物遺存体について

### 1 中村町遺跡第5次調査出土葉の同定

佐々木由香・パンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）

#### 1.はじめに

中村町遺跡は福岡県福岡市南区野間に位置し、縄文海進期には海に面して立地していたと推定される縄文時代前期を主体とする遺跡である。第5次調査では、谷と河川が検出され、谷は現地表面から約5mの深さで標高25~30m前後、前期の河川底面は現地表面から220cmで標高5.6m前後であった。遺物は調査区の東半分から縄文時代前期中葉から後葉（若干旧石器と早期、中期初頭を含む）の土器と石器が多量に出土した。河川中には、植物遺体が約10cmの厚さで良好に堆積した窪みが2ヶ所検出された。ここでは、XXXXXから出土した縄文時代X期の葉を主体とした大型植物遺体同定を行ったので報告する。なお、同定にあたり、千葉大学園芸研究科百原新准教授と森林総合研究所能城修一氏のご教示を得た。

#### 2. 試料と方法

試料は、縄文河川（第5図1118）底面の窪みA・Bから出土した大型植物遺体759点である。大型植物遺体は層状に密集しており、その中から状態が良いものについて、福岡市埋蔵文化財センターで抽出・水洗され、1枚単位で透明フィルム中にシーリングされていた。同定は肉眼および実体顕微鏡下で行った。なお、葉は福岡市埋蔵文化財センターに保管されている。

#### 3. 結果

同定の結果、広葉樹のイチイガシ葉とアラカシ葉、シラカシ葉、ツクバネガシ葉、コナラ属アカガシ葉、シユキ葉、ブナ科雄花序、タブノキ葉、ムクノキ科葉、モチノキ葉の9分類群が見いだされた。この他に科以下の同定ができなかった不明AとBの葉、不明の冬芽があった。以下紙面の都合上、代表的な分類群の記載を行い、各分類群の写真を図版に示す。

表1 測定試料および処理

分類群	採取位置	I 区			II 区		合計	%
		赤	緑	黄	1119	29		
イチイガシ	葉	234	388	43	29	694	91.4%	
アラカシ	葉	1	4			5	0.7%	
シラカシ	葉	2	5			7	0.9%	
ツクバネガシ	葉		1			1	0.1%	
コナラ属アカガシ葉	葉	13	2	7	1	23	3.0%	
ブナ科	雄花序		7			7	0.9%	
タブノキ	葉		4			4	0.5%	
ムクノキ科	葉	2	2			4	0.5%	
モチノキ	葉	1	4			5	0.7%	
不明A	葉			4		4	0.5%	
不明B	葉		3			3	0.4%	
不明	冬芽		2			2	0.3%	
		253	422	54	30	759	100.0%	

##### (1) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 葉 ブナ科

黒褐色で、倒披針形。革質で、先端部にのみ鋸歯がある。主脈は裏面に突出する。長さ49.5~131.6mm、幅14.1~49.7mm。

##### (2) シラカシ *Quercus myrsinifolia* Blume 葉 ブナ科

黄褐色で、狭長橢円形。やや革質。破片だが、完形ならば先端は鋸く尖る。基部はくさび形。葉の縁全体の3/2以上に浅くてやや鋸い鋸歯がまばらにある。長さ67.0mm、幅18.6mm。

##### (3) ツクバネガシ *Quercus sessilifolia* Blume 葉 ブナ科

黒褐色で、革質で厚く、完形ならば広披針形または橢円形で先は鋸く尖る。縁はほぼ全縁で、完形ならば先端に鋸歯がある。主脈は裏面に突出する。側脈は交互状。長さ86.2mm、幅25.9mm。

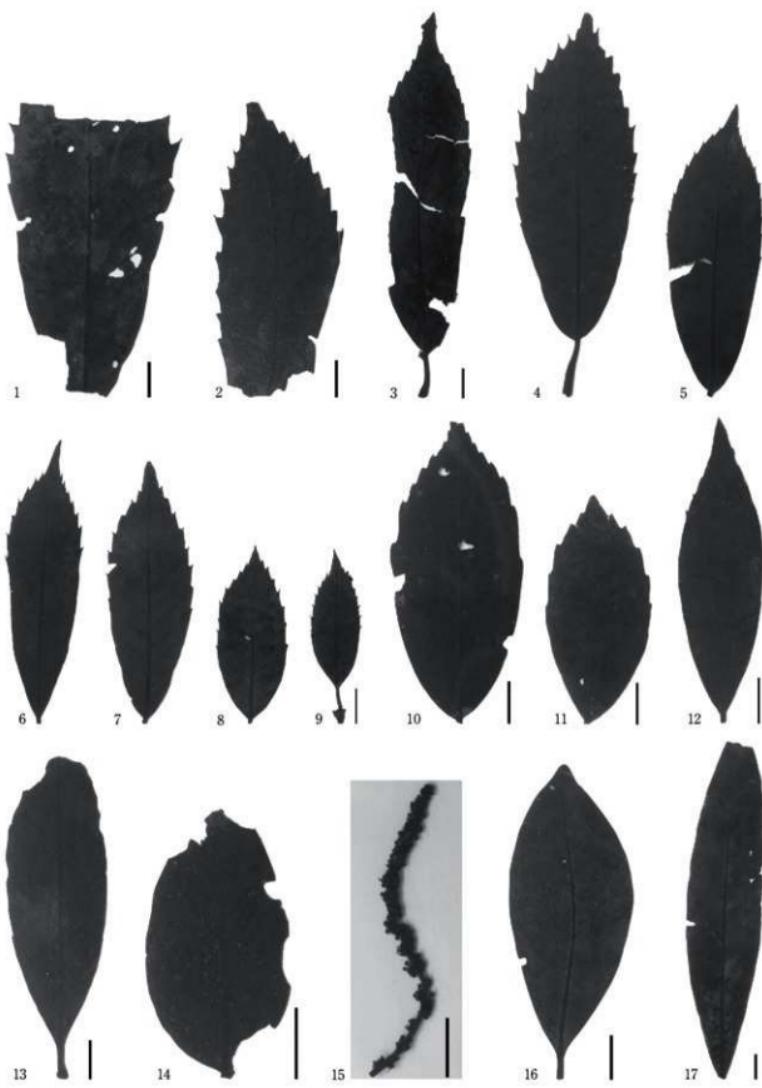


図1 中村町遺跡出土の葉(1)

スケール 1-17:10mm

1・2. イチイガシ葉(Ⅰ区)、3. イチイガシ葉(Ⅱ区、1119)、4・9. イチイガシ葉(Ⅱ区)、10・11. アラカシ葉(Ⅱ区)、12. シラカシ葉(Ⅱ区)、13. ツクバネガシ葉(Ⅱ区)、14. コナラ属アカガシ亜属葉(Ⅱ区)、15. ブナ科雄花序(Ⅱ区)、16. タブノキ葉(Ⅱ区)、17. クスノキ科葉(Ⅰ区)

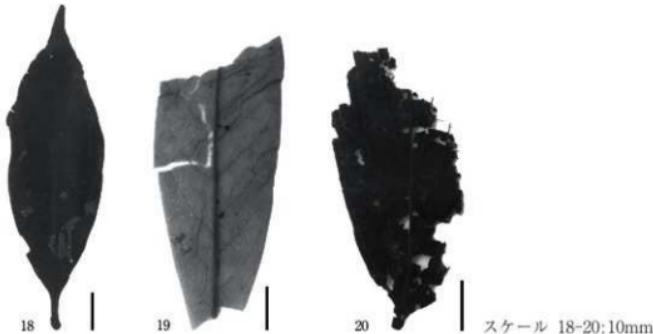
#### 4. 考察

縄文時代前期の葉を主体とする大型植物遺体を約760枚同定したところ、イチイガシが優占し、全体の91.4%を占めていた。主に常緑広葉樹のドングリ類の葉が多く、イチイガシのほか、アラカシやシラカシ、ツクバネガシ、状態が悪く種レベルの同定ができるなかったコナラ属アカガシ亜属があり、あわせて4.7%を占めた。このほかに、おそらくアカガシ亜属と思われるが、科以下の同定ができるなかったブナ科の雄花序があった。ドングリ類以外では、タブノキとムクノキ科、モチノキの葉、不明AとBの葉がみられたが、これらはいずれも1%以下でわずかな産出量であった。

以上の結果から当時の景観を復元すると、イチイガシを主体とする常緑広葉樹林が広がっていたと考えられる。特に、通常低湿地遺跡でも残存しにくいブナ科の雄花序が堆積物中に一定量みられる点や、雄花序と葉の保存状態が良い点から、これらのカシ類は遺跡のごく近くに生育していたと考えられる。編組製品の同定結果では、アカガシ亜属が素材として使われたことが明らかになっており（編組製品の同定結果の項参照）、果実にもイチイガシがみられる点から、河川のごく近くに生育しているカシ類を利用した資源利用が行われていたことが推察される。

表1 測定試料および処理

分類群	採取位置	調査区			合計	%
		I区 赤	緑	II区 黄		
イチイガシ	葉	234	388	43	29	694 91.4%
アラカシ	葉	1	4			5 0.7%
シラカシ	葉	2	5			7 0.9%
ツクバネガシ	葉			1		1 0.1%
コナラ属アカガシ亜属	葉	13	2	7	1	23 3.0%
ブナ科	雄花序			7		7 0.9%
タブノキ	葉			4		4 0.5%
ムクノキ科	葉	2	2			4 0.5%
モチノキ	葉	1	4			5 0.7%
不明A	葉				4	0.5%
不明B	葉			3		3 0.4%
不明	冬芽			2		2 0.3%
合計		253	422	54	30	759 100.0%



図版2 中村町遺跡出土の葉(2)

18. モチノキ葉 (II区)、19. 不明A葉 (III区)、20. 不明B葉 (II区)

## 2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林絢一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjiani・佐々木由香・菊地有希子

### 1. はじめに

福岡市中村町遺跡より出土した編組製品2点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は縄文時代前期の河川跡から出土した編組製品2点である。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 L5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、曆年年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	道跡データ	試料データ	前処理
PLD-19043	遺物No.6 プレパラートNo.なし	試料の種類:生試料・編組製品 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:12N, 塩酸:12N)
PLD-19044	遺物No.7 プレパラートNo.FKK-18	試料の種類:生試料・編組製品 試料の性状:ヨコ材 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:12N, 塩酸:12N)

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の曆年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:IntCal09)を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年範囲であり、同様に $2\sigma$ 曆年範囲は95.4%信頼限界の曆年範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および曆年較正を行った。 $2\sigma$ (95.4%の確率)の曆年範囲に沿って考察を行う。

試料No.6(PLD-19043)の年代は、3639-3620 cal BC(13.3%)および3608-3522 cal BC(82.1%)、試料No.7(PLD-19044)の年代は、3336-3211 cal BC(58.5%)、3192-3151 cal BC(13.2%)、3139-3086 cal BC(18.2%)、3061-3029 cal BC(5.5%)であった。

土器付着炭化物などの年代を用いて土器編年と曆年年代を検討した小林(2008)や、九州地方を含む地域の測定例を集めた泉(2008)と堂込(2008)の測定結果を参照すると、試料No.6は縄文時代前中期、試料No.7は中期前半に相当する曆年年代であり、河川跡から出土した土器の考古学的な年代観(縄文時代前期)と比べ、整合的な年代を示す編組製品とやや新しい年代を示す編組製品があることが明らかになった。

表2 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
PLD-19043 遺物No.6	-26.28 $\pm$ 0.13	4774 $\pm$ 22	4775 $\pm$ 20	3634BC ( 6.5%) 3628BC 3589BC (61.7%) 3528BC	3639BC (13.3%) 3620BC 3608BC (82.1%) 3522BC
PLD-19044 遺物No.7	-26.63 $\pm$ 0.18	4473 $\pm$ 22	4475 $\pm$ 20	3325BC (49.2%) 3233BC 3224BC ( 18%) 3220BC 3173BC ( 5.7%) 3161BC 3118BC (11.4%) 3095BC	3336BC (58.5%) 3211BC 3192BC (13.2%) 3151BC 3139BC (18.2%) 3086BC 3061BC ( 5.5%) 3029BC

なお、本分析は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジアの新石器時代遺跡出土編組製品等素材の考古植物学研究拠点の形成と展開」（代表 鈴木三男）の一部を使って行われた。

#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 堂込秀人（2008）曾畠式土器。小林達雄編「総覧縄文土器」:790-797。アム・プロモーション。
- 泉 拓良（2008）鷹島式・船式・里木II式土器。小林達雄編「総覧縄文土器」:790-797。アム・プロモーション。
- 小林謙一（2008）縄文時代の曆年代。小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「歴史のものさし 縄文時代の考古学2」:257-269。同成社。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」:3-20。日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

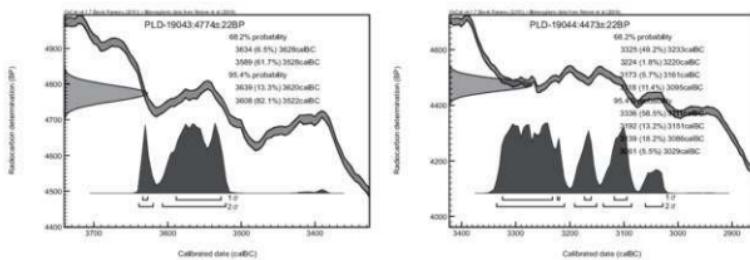


図1 曆年較正結果

### 3 中村町遺跡第5次調査出土編組製品の素材同定

能城 修一（森林総合研究所木材特性研究領域）

鈴木 三男（東北大学植物園）

小林 和貴（東北大学植物園）

佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）

#### 1.はじめに

中村町遺跡は福岡県福岡市に位置し、縄文海進期には海に面して立地していたと推定される縄文時代前期を主体とする遺跡である。第5次調査では、谷と河川が検出され、谷は現地表面から約5mの深さで標高25~30m前後、前期の河川底面は現地表面から220cmで標高5.6m前後であった。遺物は調査区の東半分から縄文時代前期中葉から後葉（若干旧石器と早期、中期初頭を含む）の土器と石器が多量に出土した。河川中には植物遺体が約10cmの厚さで良好に堆積した堆みが2カ所検出された。ここでは堆みの中から出土した縄文時代前期の編組製品の素材の同定を行ったので報告する。なお、一部の製品を用いて放射性炭素年代測定が行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

#### 2. 試料と方法

編組製品は7個体で、いずれも破片である。試料の採取方法は、編組技法および製品の上下方向を観察しながら、極力直接素材同定用の試料を採取した。製品が小さいものは、検出中にははずれた位置不明な素材を試料とした。直接採取する場合は、縱方向の素材をタテ材とし、横方向の素材をヨコ材として、残存が良好なものについてカミソリを用いて採取した。可能な限り、1点について複数採取したため、試料数は16点である。

切片の作製方法は試料をアセトン系列で脱水した後にエボキシ樹脂（Agar Low Viscosity Resin）に包埋し、回転式ミクロトーム（Microm HM350）を用いて切片（厚さ10~30μm）を作製した。

プレバーラートにはFKK-1~16の番号を付した。プレバーラート標本は東北大学植物園に保管されている。

#### 3. 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属）とホルトノキ属、草本植物？の表皮の3分類群が同定された。これら以外に素材の状態が悪く以下の同定に至らなかった一群を同定不能とした。製品の同定結果と技法の観察結果を表1、プレバーラートごとの同定結果を付表1に示した。

表1 中村町遺跡編組製品観察表および同定結果

試料No.	残存高 (mm)	残存幅 (mm)	タテ材	ヨコ材		器種	編組技法	年代測定No.
				幅(mm)	木取り			
1	40	45	4.0 剥り裂き材	(アカガシ亜属)	4.5~5.0 剥り裂き材	(アカガシ亜属)	かご?	2本飛び網代
2	60	65	3.5~4.0 剥り裂き材	アカガシ亜属	2.5~3.5 剥り裂き材	アカガシ亜属	不明	網代?
3	-	-	3.0~3.5 剥り裂き材	(同定不能)	3.5 剥り裂き材	(同定不能)	不明	網代
4	65	70	5.0~6.0 剥り裂き材	アカガシ亜属	4.0~7.0 剥り裂き材	アカガシ亜属	かご?	2本飛び網代
5	55	60	5.0 剥り裂き材	アカガシ亜属?	5.0 剥り裂き材	未採取	かご?	2本飛び網代?
6	90	140	5.0~7.0 剥り裂き材	アカガシ亜属	4.0~7.0 剥り裂き材	アカガシ亜属	かご?	2本飛び網代 PLD-19043
7	90	95	25~40 剥り裂き材	同定不能	30~30 剥り裂き材	アカガシ亜属	不明	2本飛び網代? PLD-19044

同定結果はタテ・ヨコ材不明な試料、サンプリングエラーの結果は除く

次に、試料番号ごとに同定結果および編組技法を記載する。素材はタテ材とヨコ材ともに剥り裂き材を使用している。

試料No.1：残存高4.0mm、残存幅4.5mmである。編組技法は2本飛び網代で、上部にむかってタテ材を重ねてタテ材の本数を減らしている。素材は直接採取できなかつたが、採取したサンプルのうち2点がアカガシ亜属であり、1点は草本植物と思われる表皮であったため、表皮はサンプリングエラーの可能性がある。

試料No.2：残存高6.0mm、残存幅6.5mmである。編組技法は網代の可能性があるが、状態が悪く、それ以上の観察はできなかつた。タテ材はタテ材1本分の間隔があく。ヨコ材は密かあるいは3本ごとに密と粗の部分があるか。器種は不明である。一括採取されたタテ材とヨコ材それぞれでアカガシ亜属が同定された。

試料No.3：状態が悪く全体形は不明である。編組技法は網代であるが、状態が悪く、それ以上の観察はできなかつた。器種は不明である。一括採取された素材では同定不能であった。

試料No.4：残存高6.5mm、残存幅7.0mmである。編組技法は2本飛び網代で、上部にむかってタテ材を重ねてタ

テ材の本数を減らしており、かごなどの上部がすばまる形状をしていたと想定される。タテ材でアカガシ亜属、ヨコ材でホルトノキ属が同定されたが、ホルトノキの木取りは丸木がつぶれた状態で、サンブリングエラーの可能性が高い。

試料No.5：残存高5.5mm、残存幅6.0mmである。ただし、全体的に劣化しており、計測値は収縮した値である。編組技法ははっきりしないが2本飛び網代の可能性が高く、上部にむかってタテ材を重ねてタテ材の本数を減らしており、かごなどの上部がすばまる形状をしていた可能性がある。収縮していたためタテ材のみ採取し、アカガシ亜属？であった。

試料No.6：残存高9.0mm、残存幅14.0mmである。編組技法は2本飛び網代で、部分的に3本飛びとなる。上部にもむかってタテ材を重ねてタテ材の本数を減らしており、かごなどの上部がすばまる形状をしていたと想定される。タテ材とヨコ材でアカガシ亜属が同定された。年代測定試料が採取された（PLD-1904）。

試料No.7：残存高9.0mm、残存幅9.5mmである。編組技法は2本飛び網代の可能性がある。タテ材はタテ材1本分の間隔がある。ヨコ材は密かあるいは3本ごとに密と粗の部分がある。器種は不明である。タテ材は同定不能で、ヨコ材はアカガシ亜属？が同定された。年代測定試料が採取された（PLD-1904）。

以下に同定した分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

- (1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科図1：1a.1c (割り裂き材、FKK-12), 2b (割り裂き材樹皮付き、FKK-5)

中型で厚壁の丸い孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は單一。木部柔組織は幅が狭く不揃いな帯状。放射組織は同性で、単列で小型のものと大型の複合状のものとからなる。

- (2) ホルトノキ属 *Elaeocarpus* ホルトノキ科図1：3a.3c (丸木材、FKK-10)

小型で丸い道管がしばしば放射方向に2～5個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は異性で2細胞幅、道管との壁孔は单壁孔様で大きく、しばしば水平に大きく開く。

- (3) 表皮 *Epidermis* 図1：4a (丸材、FKK-3)

突起の多い表皮と皮層が認められるが、維管束は残っておらず同定には至らなかった。

#### 4. 考察

編組製品7点中、6点の素材を同定することができ、そのうち5点にはアカガシ亜属の割り裂き材が用いられていた（表1）。割り裂き方向は板目から柾目まであり、一定していなかった。また1点には直径3mmほどのホルトノキ属の枝材が、またもう1点には草本と思われる丸材が使われていたが、これらは編組製品以外の植物遺体である可能性が高い。また、編組技法は2本飛び網代が多く、状態が悪いものを含めて編組技法はすべて網代であったが、素材の間隔や幅によって、2種類に分類される。すなわち、試料No.1、4～6の4点はタテ材とヨコ材が幅を持ち密に組まれた技法であり、試料No.3と7の2点はタテ材とヨコ材の幅が狭く、タテ材の間隔があき、ヨコ材についても密か3本単位で間隔がある技法である。No.3は状態が悪く技法の観察ができないため不明だが、タテ材とヨコ材の幅は後者に近い。

試料No.1。

4～6は上部にむかってタテ材を重ねてタテ材の本数を減らしており、かごなどの上部がすばまる形状をしていたと想定される。こうした技法は佐賀県の縄文時代早期後葉の東名貝塚のかごで多く見られる（佐賀市教育委員会、2009）。本遺跡の編組製品は破片のため全体の形状はいずれも不明であるが、多くは東名遺跡のかごにみられるような上部がすばまる形状をしていた可能性がある。

アカガシ亜属の編組製品への利用は、熊本県の縄文時代前期の曾畠貝塚で2点報告されており（熊本県教育委員会、1988）、大分県の縄文時代後期の龍頭遺跡でも1点見いだされている（能城ほか、未報告）。今回の事例によつて、縄文時代前期以降、九州中北部では、アカガシ亜属が編組製品の主要な素材の一つとして選択されていたことが示された。一方、今回、これだけ普遍的にアカガシ亜属が編組製品の製作に使われていたことにより、アカガシ亜属の緻密で硬い木材を割り裂く技術をすでに縄文時代前期の人々は保有していたことが示された。

#### 引用文献

熊本県教育委員会、1988. 曾畠、389pp. 熊本県教育委員会、熊本。

佐賀市教育委員会、2009. 東名遺跡群II 第5分冊 東名遺跡2次遺物編2、456pp. 佐賀市教育委員会、佐賀。

付表1 中村町遺跡出土編組製品の素材同定結果一覧

プレバート	樹種	試料No.	採取位置	木取り	割り方向
FKK-1	コナラ属アカガシ亜属	1	タテヨコ不明-1	割り裂き材	追柾目
FKK-2	コナラ属アカガシ亜属	1	タテヨコ不明-2	割り裂き材	板目
FKK-3	表皮	1	タテヨコ不明-3	丸木	
FKK-4	同定不能	2	タテ材	割り裂き材	
FKK-5	コナラ属アカガシ亜属	2	タテ材 (位置不明)	割り裂き材	板目
FKK-6	同定不能	2	ヨコ材	割り裂き材	
FKK-7	コナラ属アカガシ亜属	2	ヨコ材 (位置不明)	割り裂き材	
FKK-8	同定不能	3	タテヨコ不明	割り裂き材	柾目
FKK-9	コナラ属アカガシ亜属	4	タテ材	割り裂き材	追柾目
FKK-10	ホルトノキ属	4	ヨコ材	丸木	
FKK-11	コナラ属アカガシ亜属?	5	タテ材	割り裂き材	
FKK-12	コナラ属アカガシ亜属	6	タテ材-1	割り裂き材	柾目
FKK-13	コナラ属アカガシ亜属	6	タテ材-2	割り裂き材	板目
FKK-14	コナラ属アカガシ亜属	6	ヨコ材	割り裂き材	追柾目
FKK-15	同定不能	7	タテ材	割り裂き材	
FKK-16	コナラ属アカガシ亜属?	7	ヨコ材	割り裂き材	

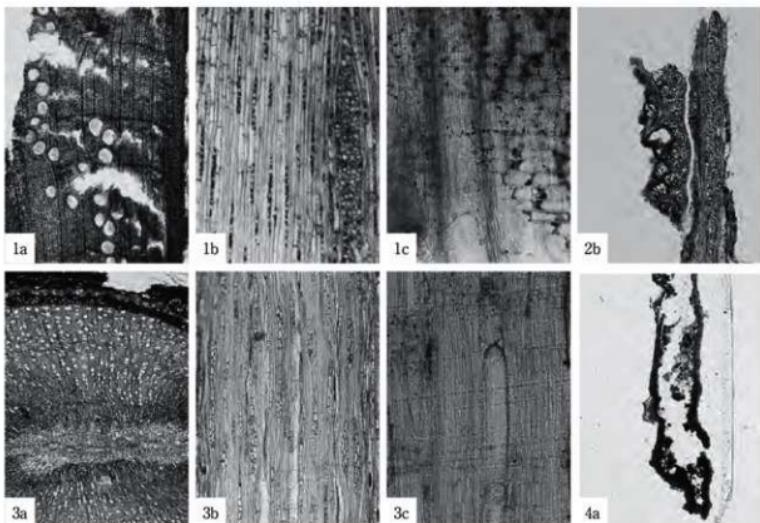
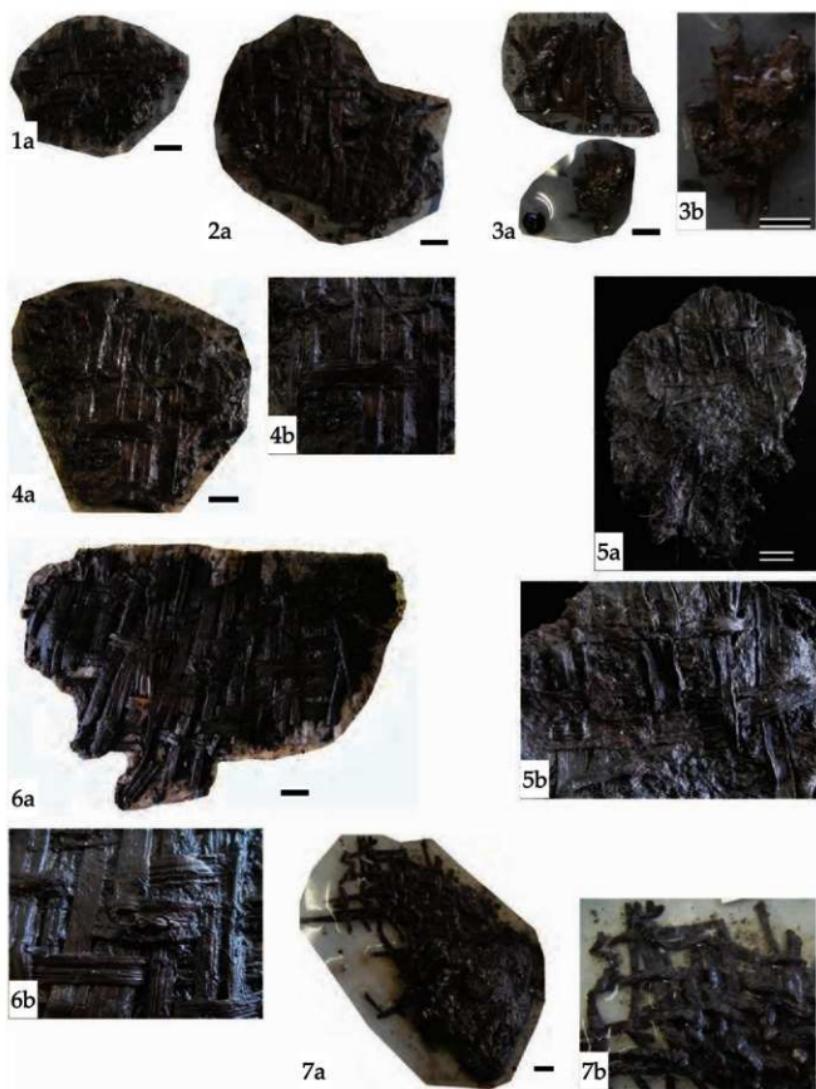


図1. 中村町遺跡出土編組製品の顕微鏡写真。1a-1c: コナラ属アカガシ亜属（割り裂き材, FKK-12）、2b: 同樹皮付き（割り裂き材, FKK-5）、3a-3c: ホルトノキ属（丸木材, FKK-10）、4a: 表皮（丸材, FKK-3）。a: 横断面（スケール = 200  $\mu\text{m}$ ）、b: 接線断面（スケール = 100 (1b, 3b), 200 (2b)  $\mu\text{m}$ ）、c: 放射断面（スケール = 50  $\mu\text{m}$ ）。



図版1 中村町遺跡から出土した編組製品

1. No.1、2. No.2、3. No.3、4. No.4、5. No.5、6. No.6、7. No.7. a: 全体, b: 拡大. スケール=1cm.



1. I 区（北から）



2. II 区（北から 手前が I 区で縄文河川掘り下げ中）



1. I 区 包含層除去状況（南から）



2. I 区 包含層除去状況（北から）



3.SD1003（北から）



4.SD1029（南から）



5.SD1002・1003（南から）



6.SD1041（南西から）



7. II 区（北東から）



8. III 区（南から）



1.SD1003 EF 間ベルト



2.SD1029 AB 間ベルト



3.SD1029 BC 間ベルト



4.SD1029 DE 間ベルト



5.SD1041 土層（北から）



6.SD1002・1003 検出状況（南から）



7.SD1002 土層（北から）



8.SD1003 CD 間ベルト（南から）



1.SK1053 (西から)



2.SK1053 土層 (南から)



3.SD1002 遺物出土状況 (西から)



4.SK1018 (東から)



5.植物遺存体出土状況 1



6.植物遺存体出土状況 2



7.植物遺存体出土状況 3



8.植物遺存体出土状況 4



1. 縄文河川遺物出土状況



2. 縄文河川西端土層（1121・1123 北から）



3. 縄文河川（1121・1123 北から）



4. 縄文河川切り合い（南から 左側が 1122）



5. 縄文河川西端土層（1121・1123 北から）



6.Aトレーンチ土層（南から）



7.Cトレーンチ土層（北から）



8. 調査区南壁土層（北から）

## 報告書抄録

ふりがな	なかむらまちいせき4						
書名	中村町遺跡4						
副書名	中村町遺跡第5次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1159集						
編著者名	屋山洋						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	2012年3月16日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
中村町遺跡5次	福岡市南区野間 3丁目160番3	40134	20167	33°33'39"	130°24'53" ~ 20100524 20100820	530m <sup>2</sup>	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中村町遺跡第5次	包含層 集落	縄文時代前期 弥生時代後期～古代	河川 溝、土坑、掘立柱建物	土器、石器、植物遺存体 弥生土器、土師器、須恵器 環、須恵器壺	縄文時代前期の土器と 石器、植物遺存体などの多量の遺物が出土した		
要約	中村町遺跡は那珂川左岸の南北方向に伸びる丘陵上に位置する。今回の5次調査区は丘陵から東側にはずれた河川堆積上に位置する。調査では現地表面から80cm下の黄灰褐色シルト層上面で弥生時代～古代と思われる溝や土坑、掘立柱建物を検出した。また、黄灰褐色シルト層下の褐色粗砂層中から縄文時代前期後半から中期前葉にかけての多量の土器や石器と共に葉やドングリなどの植物遺存体と樹皮で編んだ編組片が出土した。						

### 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1159集

## 中村町遺跡4

— 中村町遺跡第5次調査報告 —  
2012年（平成24年）3月16日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 森田印刷所  
福岡市中央区大手門2-1-21